

教職員みんなで
島根の子ども一人一人が育つ
学級集団づくりをしよう！

学級集団づくり 魅力ガイドブック



平成26年3月
島根県教育センター

はじめに

今、改めて学級集団づくりの重要性を考えるとときにきています。学力向上、いじめや不登校の未然防止、コミュニケーション能力の育成等が課題となっており、その解決を図る場や、子どもたちに「生きる力」を身につけさせていく基盤となる場が学級集団だからです。

そこで、学級集団づくりを進める上での柱となることや大切にしたいこと、またそれらを校内研修に生かすために、「学級集団づくり魅力ガイドブック」を作成しました。これは決して学級担任だけに読んで欲しいガイドブックではなく、教職員のみなさんで読んでいただきたいと思っています。それは、学級集団づくりは教職員みんなでするものだと考えているからです。

たくさんの方にこのガイドブックを手にとりいただき、これを一つの手がかりにして、明日からの実践の一助としてご活用いただけることを願っています。

活用の仕方

このガイドブックの第Ⅱ章と第Ⅲ章は、一つの内容を1ページまたは2ページにまとめています。必要なページをファイルからはずして、印刷等してお使い下さい。

島根の教職員の実践も載せています。ご自分の実践に引き寄せてお読み下さい。

○学級集団づくりのポイント

・どの学年にも共通すること

学級集団づくりを進めるにあたって、どの学年にも共通することを(1)～(11)の項目に挙げました。まずはこの共通ポイントから読んでみてください。発達段階に関係なく、学級集団づくりにおいて基盤となっていることを載せています。

・各学年のポイント、様々な学級のポイント

ここでは小学校1年生から高校1年生まで、また複式学級、クラス替えのない学級・少人数の学級、普通高校・専門高校について、学級集団づくりのポイントを挙げています。それぞれの学年、項目で発達段階や特徴を考え、それぞれの段階でポイントとなりそうなことをキーワードとして載せています。

・様々な方法や心にとめておきたいこと

学級集団づくりのいくつかの方法や、心にとめておきたいことを紹介しています。

○校内での研修

学級集団づくりについて、個人や学年、学校全体で学びを深める、計画を立てる、または自分の実践を振り返るための手立てとして校内研修の方法を示し、ワークシートも作りしました。各項目を読んでいただくことに併せて、是非ご活用下さい。

本来ならば、最初のページから読んでいただきたいのですが、忙しい日々です。目次を見ていただき、ちょっと気になったところ、心にひっかかったところからでも読んでみてください。

も く じ

| | | |
|------|-------|---|
| はじめに | ----- | 1 |
| もくじ | ----- | 2 |

第Ⅰ章 改めて考える・知る

「学級集団をつくる意味～学級集団づくりって大切!?～」

| | | |
|-------------------------------|-------|---|
| 1 学級集団のもつ力 | ----- | 5 |
| 2 学級集団のもつ魅力 | ----- | 5 |
| 3 学校・学級という集団がおちいる可能性のあるマイナスの面 | ----- | 6 |
| 4 現代の子どもたちの特徴を知る | ----- | 6 |
| 5 島根県の学級集団の状況を知る | ----- | 7 |

第Ⅱ章 読む「学級集団づくりのポイント」

| | | |
|---|-------|----|
| 1 どの学年にも共通すること | | |
| (1) マズローの欲求階層説を参考にする | ----- | 9 |
| (2) 実態を把握する、児童生徒理解に努める | ----- | 10 |
| (3) 教師の願いと子どもの願いを合わせ、共有する | ----- | 11 |
| (4) 学級集団づくりの中で一人一人の子どもにつけたい力を考える | ----- | 12 |
| (5) 環境を整える | ----- | 13 |
| (6) ルールをつくり、定着させる | ----- | 14 |
| (7) 「個」とつながる、「個」と「個」をつなぐ | ----- | 15 |
| (8) 毎日の授業で学級集団づくりをする | ----- | 16 |
| (9) リーダーを育てる | ----- | 17 |
| (10) 教職員みんなが参画する | ----- | 18 |
| (11) 保護者の理解を図る | ----- | 19 |
| 2 各学年のポイント～発達の特徴を生かして | | |
| (1) 小学校1年生の学級集団づくり ドキドキの1年生～学校生活の基盤づくり～ | ---- | 20 |
| (2) 小学校2年生の学級集団づくり 慣れて安心2年生～「友だちっていいな」の体験を～ | 22 | |
| (3) 小学校3年生の学級集団づくり わんぱく盛り3年生～ギャングエイジを大切に～ | -- | 24 |
| (4) 小学校4年生の学級集団づくり 安定感のある4年生～仲間とともに育つ～ | ----- | 26 |
| (5) 小学校5年生の学級集団づくり ようこそ思春期5年生～揺れに付き合いながら～ | -- | 28 |
| (6) 小学校6年生の学級集団づくり 最高学年6年生～リーダーとしての役割と責任を～ | 30 | |
| (7) 中学校1年生の学級集団づくり 実は力を持っている中学1年生～その力を生かす～ | 32 | |
| (8) 中学校2年生の学級集団づくり 先輩と呼ばれる中学2年生～積み重ねの時期に～ | - | 34 |
| (9) 中学校3年生の学級集団づくり 進路決定の中学3年生～中学を「やりきる」～ | --- | 36 |
| (10) 高等学校1年生の学級集団づくり 一斉スタートの高校1年生～社会につなぐ～ | - | 38 |

| | | |
|-----|------------------------------------|----|
| 3 | 様々な学級のポイント | |
| (1) | 複式学級の学級集団づくり | 40 |
| (2) | クラス替えのない学級・少人数学級の学級集団づくり | 41 |
| (3) | 普通高校・専門高校の学級集団づくり | 42 |
| 4 | 様々な方法や心にとめておきたいこと | |
| (1) | 日常の働きかけを大切にする | 43 |
| (2) | 教職員のかかわりの力を磨く | 44 |
| (3) | アンケートQ-Uを生かす | 45 |
| (4) | 特別活動を生かす | 46 |
| (5) | 人とかかわる力や集団を育てる学習を実施する | 47 |
| (6) | 人とかかわる力や集団を育てる学習を実施する時の配慮 | 48 |
| (7) | トラブルを成長のチャンスととらえる | 49 |
| (8) | 支援の必要な子どもたちや休んでいる子どもたち、その周囲の子どもたちに | 50 |

第三章 語り合う・向き合う「学級集団づくりの研修」

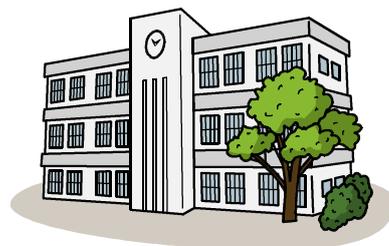
| | | |
|-----|----------------------------------|----|
| 1 | 校内で学級集団づくりの力を高める | |
| (1) | 校内研修の進め方 | 51 |
| (2) | 校内研修用ワークシート | |
| ① | 学級集団づくりは何をめざすのか | 53 |
| ②a | 学級のルール～何を大切にしますか・どうやって定着させますか～ | 54 |
| ②b | 学級のルール〈付箋での研修用〉 | 55 |
| ③ | 学級集団づくりの願いやプランを共有する | 56 |
| ④ | 一人の“だから”をみんなの“だから”に | 57 |
| ⑤ | []年 []組のよさや成長を見つける | 58 |
| ⑥ | 各学年の子どもたちの発達の特徴を理解する | 59 |
| ⑦ | 教職員のみなさんに感謝していること | 60 |
| ⑧ | 私はわたし…語る「わたし」披露します | 60 |
| 2 | 学級担任の学級集団づくりを助ける～学級担任のためのワークシート～ | |
| ① | 学級集団づくりのプランをたてる | 61 |
| ② | 学級集団の状況を把握する | 62 |
| ③ | つけたい力を考える | 63 |
| ④ | 気にかかっていることを整理する | 64 |
| ⑤ | 子どもたちに語る自分のこと | 65 |
| ⑥ | 教室環境をチェックする | 66 |
| ⑦ | どの子どもどのなところを生かす(伸ばす)か考える | 67 |

【参考文献】

学校教育の特徴として、社会性を育成するということが内包されている。そのために学校の先生方はすごくエネルギーを使っているはずなのです。

スキルや知識だけを教えることだけをよしとしない教育が学校教育なのだということを、先生方には自覚してほしいし、誇りに思ってもらいたいと思います。

菅野 純 『月刊学校教育相談』2013年12月号より



第Ⅰ章

改めて考える・知る

「学級集団をつくる意味
～学級集団づくりって大切!?～」

日本の学校教育においては、教職員がよりよい学級集団をつくっていかうとすることは当然のことであり、多くの教職員がこのことに大きなエネルギーを注いでいます。しかし、なぜ学級集団づくりが必要で、大切なのでしょう。実はこのことについてあまりつきつめて考えたことがないというのが現状ではないでしょうか。

よりよい学級集団をつくっていかうとする前に、このことについていくつかの視点で述べてみます。

1 集団のもつ力

学級集団づくりについては様々な考え方があります。そしてまたこうすればいいというマニュアルもありません。子どもは集団の中で「学力が伸びる」「人とかかわる力がつく」等と言われる一方で、「集団の中にいるから個の力が伸びない」という声も聞きます。

ここで次の文章を紹介します。

人間関係は人に何をもたらすのか、人間関係は自己の確立を援助するのである。

人は自分で悟って自身で自己概念をつくっていくのではない。いろいろな人とかかわり合い、「君ってこうだね」などとさまざまなフィードバックをもらいながら、自分のイメージが固まっていく。そして、はじめて自己が確立されるのである。人間が人間になるためには人間が必要なのである。

『育てるカウンセリング実践シリーズ2小学校編

グループ体験による（タイプ別）学級育成プログラム』河村茂雄編著（図書文化）

集団ができていく要素の一つに人間関係があります。現代社会の中では「人間関係づくり」「コミュニケーション能力」といった言葉をよく耳にしますが、河村氏の考えにもあるように、自己確立のために、人間が、集団が必要であると言えます。「集団の中にいるから個の力が伸びない」のではなく、「集団の中でこそ個が育つ」と言えるのではないのでしょうか。子どもたちにとってのその集団が、学級なのです。

学級集団は子どもが成長する場。

- 学級集団の中で個を育てるという視点
- 学級集団そのものを育てるという視点

これら両方の視点をもっていることが大切だと思います。

2 集団のもつ魅力

次に、集団のもつ魅力について考えてみます。

昨今、個別の支援が必要な子どもへの対応の難しさや、子どもとのかかわりに困難さを感じる、保護者との関係づくりがうまくいかない等の理由から、「担任をしたくない」という声を耳にします。

しかし教職員として、時に担任として、また自身が学生だったときを思い起こしてみると、次のような体験・思い出がなかったでしょうか。

授業中、様々な意見や考えが飛び出し、大いに授業が盛り上がりそして深まったこと。音楽会で心が一つになった子どもたちの歌声を聞き、こみ上げるものがあったこと。体育祭の時、いろいろなトラブルを乗り越えて、チームが一つになって踊り、精一杯声を張り上げる子どもたちの応援を見て胸が熱くなったこと。普段の何気ない出来事で、教室でみんなで大笑いしたこと。「3年5組最高！」と卒業の寄せ書きに書く子どもたち。学級で問題が起きたとき、直接かかわっていない子どもたちも、真剣に考えて意見を言い、クラスの問題として向かってくれたこと。

決して一人では為し得ないことが、みんなの力、集団の力でならぬ。人といっしょに何かをすることの喜びを感じとる。これこそが、集団のもつ魅力なのではないでしょうか。決して表面的な仲のよさやまとまりではなく、葛藤や対立を乗り越えて獲得した学びある集団。このような集団のもつ魅力も、集団づくりをしていく大きな意味の一つであると思います。

そして、そんな体験をした子どもたちは、次に属する集団でも、またそんな集団をつくらうとするでしょう。

3 学校・学級という集団がおちいる可能性のあるマイナスの面

1、2で述べたように、「学級集団」というのはプラス面の意味だけを持つのでしょうか。ここで集団であるがゆえのマイナス面を考えてみます。

例えば、

- ・子ども同士、無言の圧力とも言えるものが存在する。
- ・同一性を求められすぎると、息苦しさを覚える子どももいる。
- ・小グループができやすく、互いに対立する、排他的・防衛的になる傾向がある。
- ・ルールがあることで必ずネガティブな反応を示す子がいる。
- ・基本的に同年齢の集団であるから、何をやっても単純に比較される集団である。

などがあります。他にも集団のもつマイナス面があるかもしれません。

しかし、学級集団制度と、それを成立させる学習指導と生徒指導とを教師が統合して行っていくという指導体制は日本の学校教育の基本システムです。マイナス面もあるということを理解しながら私たち教職員は、「学級集団」の魅力を引き出していきたいと思います。

4 現代の子どもの特徴を知る

昨今、以前と比べて学級集団づくりが難しくなってきたという声を学校現場からよく聞きます。理由としてはいくつか考えられますが、河村氏は「科学技術の進歩、高度産業社会、高度消費社会、情報化社会、経済的豊かさ、地域共同体の衰退など、社会の変化によって子どもたちを育てる家庭教育、地域社会教育の力が低下し、従来の日本型の理想の学級集団を形成するための条件が失われている」ため、「日本型の学級集団が成立しにくい現状がある」と指摘しています。

そして、「子どもたちの実態を、教師の支援の必要レベルで考えるとわかりやすい」と述べています。

1次支援レベルー全体に指示すれば、自ら1人で取り組める子ども

2次支援レベルー全体のなかで、個別にさりげない支援が必要な子ども

3次支援レベルー全体活動に参加させる前に、個別に、特別な支援が必要な子ども

同氏は、「従来は、1次支援レベルの子どもたちが学級の大部分を占め、教師は全体に向かって学級のルールや、期待される行動について一斉指導を中心に行うことができ、必要に応じて、2次支援レベル、3次支援レベルの子どもに対応すればよかった」が、「しかし最近では、家庭や地域で、対人関係や社会参加の体験学習が少なく、2次支援レベル、3次支援レベルの子どもの比率がとて多くなり、従来の展開方法が望めなくなってきている」とも指摘しています。

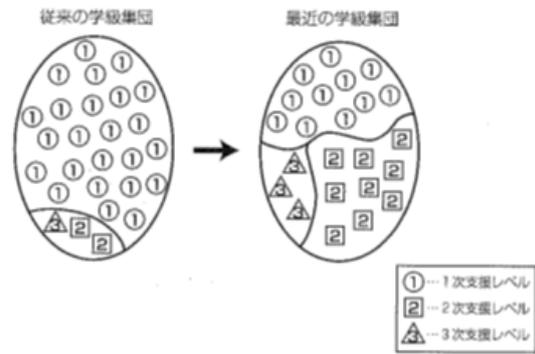


図 8-8 学級を構成する子どもの支援レベルの分布の変化 (河村 2020)

よって、現代において学級集団づくりを進めるにあたっては、人とかかわる経験の少ない子どもたちに、以前よりも多くのエネルギーと時間をつかって教職員がかかわっていく必要があります。それは、大変ではありますが、子どもたちを育てる「やりがい」と喜びにつながるのではないのでしょうか。

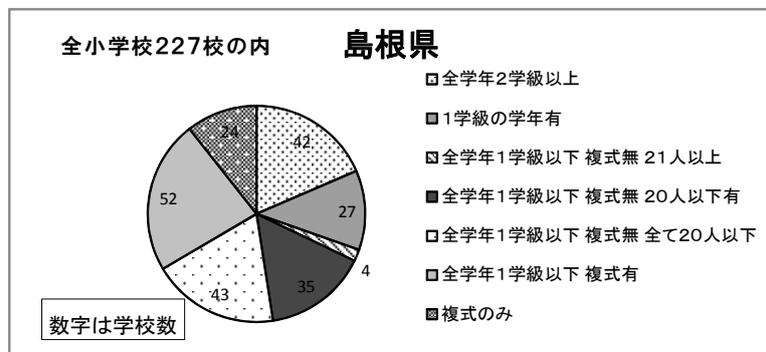
5 島根県の学級集団の状況を知る (島根県教育委員会 平成24年5月のまとめより)

学級集団と一言と言っても、様々な人数構成の集団があります。学級集団づくりに大切なことは、人数の多少に関係ないのかもしれませんが、ただ、40人の学級と5人の学級、また複式学級やクラス替えのない学級等人数によって学級集団づくりのポイントにちがいがあるかもしれません。島根県の状況を見てみましょう。

○小学校の現状

島根県全体の現状をグラフで示しています。県全体を見ると、全学年2学級以上で、毎年、または隔年でクラス替えがあり、学級の構成メンバーが変わると考えられる学校は、約2割です。約7割の学校は、1部の学年または全学年(複式学級を有する学校も含む)において、6年間学級の大半のメンバーが変わらない集団で過ごしていると考えられます。

複式のみの学校は県全体の1割です。異学年が一つの学級で過ごし、毎年メンバーが入れ替わるものの隔年で同じメンバーにもどるといふ、また違った形の集団を形成しています。



(平成 24 年 5 月)

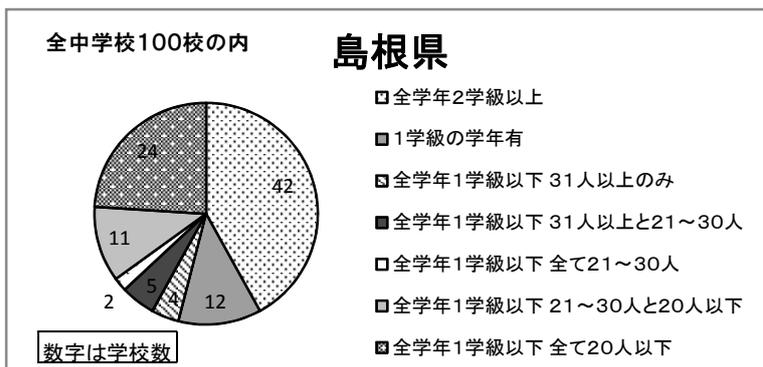
○中学校の現状

島根県全体の現状をグラフで示しています。この資料を見ると、県内の4割の学校は、どの学年も2学級以上であり、6割近い学校が、「1学級の学年を有する」または「全学年1学級以下」となっています。

学級の生徒数について見てみると、全学級20人以下の学校が、全体の約4分の1です。

このことから、クラス替えがなく、学級集団の規模も小さい学校が多いことがうかがえます。

また、小学校も中学校も学年1学級の地域では、小学校から中学校までずっと変わらないメンバーで過ごしていることも考えられ、複数の小学校から進学した場合も、学級の人数は増えても、小学校からの人間関係がそのまま続いているところも少なくないと思われます。



○高等学校の現状

県内の公立高校の学級数と生徒数について、「普通科」、「理数科」、「専門学科他」別に見てみます。

学級数について見てみると、普通科には複数の学級があり、毎年クラス替えが行われて学級のメンバーが入れ替わるところが多くなっています。一方、理数科はすべて1学級です。専門高校においても、それぞれの専攻において約6割~7割が1学級ずつで、3年間クラス替えはなく、同じメンバーで過ごしています。

学級の生徒数については、大部分の学級が30人以上ですが、中には20人に満たない学級もあります。

また、学年で1学級しかないところでは、3年間、担任が同じである場合もあります。

専門高校では、専攻によって、男女の人数の割合がアンバランスで、そこに居づらさを感じることもあります。

第Ⅱ章

読 む

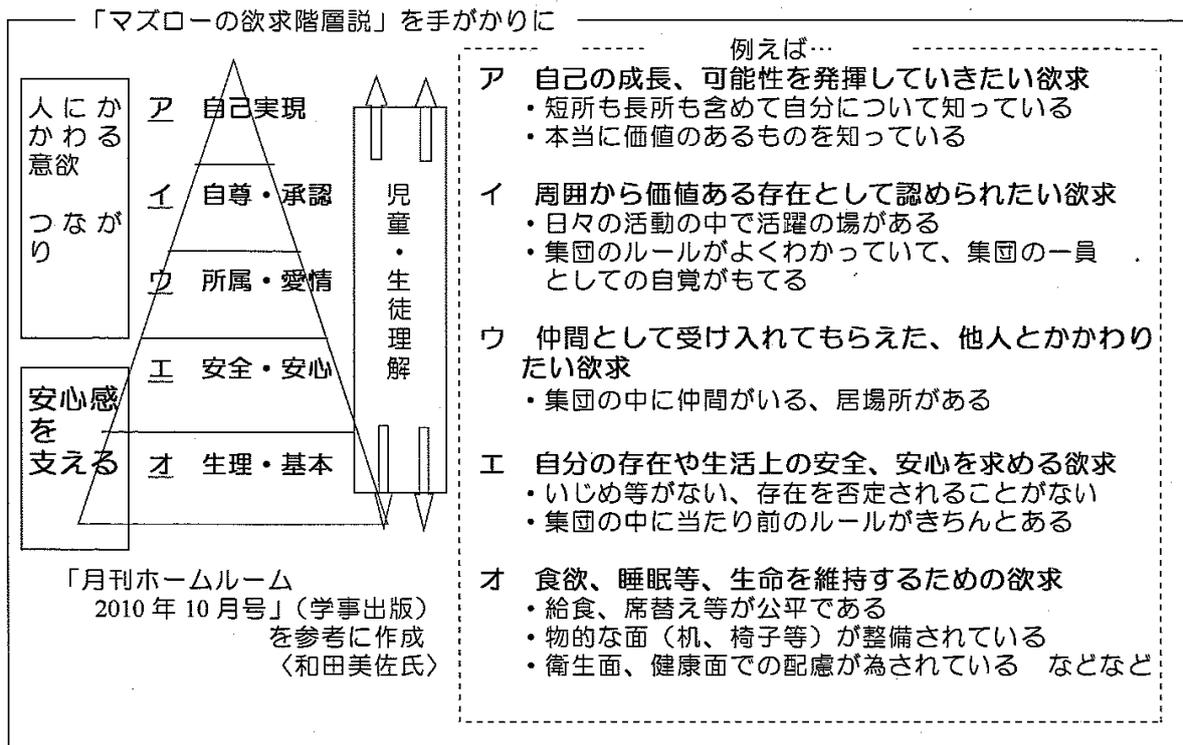
「学級集団づくりのポイント」

マズローの欲求階層説を参考にする

マズローは、「人間の欲求は層になっており、下位の層の欲求が満たされなければ上位の層の欲求は出てこない」という説を唱えました。

この考え方は、学級集団をつくっていくときにも参考になります。

次の図は、マズローの説をもとに、子どもたちにとって安心感や所属感のある学級をつくるための手がかりを示したものです。



子どもたちが成長していくことのできる学級集団を作っていくには、まず、一番下位の欲求である「生理的欲求・基本的欲求」を子どもたちに満たすことから始め、続いて下位から二番目の「安全欲求・安心欲求」を満たすことを考えます。

これら二つの欲求が満たされて安心感が支えられると、子どもたちに「所属欲求・愛情欲求」が生まれ、さらには「自尊の欲求・承認の欲求」へと進んでいきます。この段階では、子どもたち同士がかかわり合えるような取組を行ったり、一人一人が活躍できる場やお互いに認め合える場をつくったりすることが大切です。そうして、子どもたちが自己の成長を目指し可能性を發揮していこうとすること(「自己実現」)を促します。

今、子どもたちにとってどの欲求まで満たされているのかという視点を、学級集団づくりに役立てていきたいものです。

この第Ⅱ章の1では、まずどの学年でも基盤と考えられるものを提案しています。

実態を把握する、児童生徒理解に努める

新年度、子どもたちと出会う前から学級集団づくりは始まっています。子どもたちが安心して新しい学年を始められるように、個や集団についての情報を集めて整理しておくことが必要になります。

机やイスなどを個々の体格に合わせたものにするには、身体的な情報が必要です。

登校の状況や交友関係、これまでに受けた支援の様子を知り、できる配慮を考えておくと、子どもの安心につながるでしょう。座席の位置も考えておきたいことのひとつです。

また、一人一人の子どもの得意なことや苦手なこと、好みなどを前もって知っておくと、配慮の見通しがもて、つながりをつくるきっかけにもなります。

例えば 

身体測定の記録
前学年、前学校の教職員からの聞き取り、事前観察
指導要録、支援ファイルなどの記録

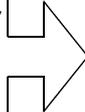
個や集団の状態は流動的です。日々の生活の中で、児童生徒理解に努めます。表情、言動、友だちとのかかわり、提出物の状況などから、小さなサインを見逃さず、課題が乗り越えられない大きなものになる前に、解決に向け、子どもたちと一緒に考えて取り組みます。

また、ネット上のトラブルなどの目に見えないトラブルもあることを心に留めておきます。

例えば 

授業や休み時間の様子の観察、毎朝の健康観察
個別相談、日記類
アンケートQ・Uなどのアンケート
学級環境

様々な方法 P45
校内研修用ワークシート
P58
学級担任のための
ワークシート
P62、64



子どもの心身等の状況について、「わかりたい」気持ちをあの手この手で形にしていきましょう。

＜島根の教職員の声＞

- ☆ 子どもたちのことが見えていると思うと見落とすので、全部が見えてはいないと思っておきます。
- ☆ 子どもの話を聴くことが一番で、一人一人や集団を理解することにつながります。
- ☆ 日記を大事にしています。友だち関係や集団の状況、時には保護者同士の関係も見えます。日記で気になったことは、教育相談で聞くこともできます。
- ☆ 自分の中で基準をもって様子を見ています。たとえば「朝夕に机が整頓されているか」「黒板はきれいか」「ロッカーはきれいか」「花瓶の花の世話をしているか」等です。どこか気になれば、個や集団の状況に何か生じているときかもしれません。
- ☆ 他の教職員から様子を聞きます。教科や部活の先生の話は参考になります。
- ☆ 学校の取組として、毎月子どもたちへのアンケートをとり、生活等の振り返りを実施しています。前月との違いもわかります。

教師の願いと子どもの願いを合わせ、共有する

4月、学級に集まった子どもたちは、自分たちの意思で集まったわけではなく、集められた状態です。いろいろな思いをもって教室に来ています。一人一人の願いや個性を大切に、安心感を支えることを基盤にして、個や集団の成長をめざして共通のめあてや目標をもてるようにします。

学校、学年の経営方針をもとに、子どもたちの実態も踏まえ、教師が学級集団や一人一人の子どもへの願いをもってそれを語り、同時に子どもの願いも聞きます。そして、子どもたちが話し合っめあてや目標を決めていくことで、学級集団を自分たちがつくるという当事者意識をもてるようにしていきます。さらに、めあてや目標に向かって実行するためには、どのようにするとよいのか、具体的な姿をイメージできるようにしておきます。それは、めあてや目標が達成されたかを評価する指標にもなります。また、折に触れ、子どもたち自身も自分たちの在り方を振り返られるよう、教師が意識して問いかけたり、課題と感じられることを投げかけたりしていくことも大切です。

例えば



教師の願いをもつ（学年・学校の願い、一人一人の教師の願い）

- ・・・ゴール（学期末、学年末）をイメージして考える、同僚と語る
- 子どもの願いを知る
- ・・・アンケート、話し合い
- 伝える、共有する（子どもと、学校・学年部で、保護者と）
- ・・・話し合い、学級通信、掲示

校内研修用ワークシートP53、56
学級担任のためのワークシートP61

新学期、担任の声に、子どもたちは大きな関心をもって耳を傾けることでしょう。

<島根の教職員の声>

- ☆ 子どもたちに「学校は、座って勉強するのも大事だけれど、友だちとの関係、先生との関係などを育てる場所で、心の勉強もしている」ということを話しています。
- ☆ 互いのよさを見つけ合えたり自分のよさに気づいたりできる集団にしたいと考えています。その中に担任である私も入っています。「隣の人がどんな呼吸をしているか聞こえるか」と子どもに問いかけます。本当は聞こえませんが、しんどい息づかいをしているなどとわかるような仲間であってほしいと思っています。そういうことが相手を大切にするとところにつながったり優しい心が作られたりすると思います。
- ☆ 新年度がスタートして子どもたちと出会ったとき、早い時期にアンケートを実施し、担任や学級に対してどのような願いをもっているのか把握します。
- ☆ 入学式の日、生徒も保護者もそろうのでチャンスです。担任としての思いや考え、方針を伝えます。
- ☆ 子どもたちの事実や思いを“捉える力”が弱くなってきたのではないかと感じています。そのためにきちんと伝わらず、子ども同士のトラブルの解決も難しくなっているのではないのでしょうか。そこで、教員の“伝える力”が問われていると思います。

学級集団づくりの中で 一人一人の子どもにつけたい力を考える

学級集団づくりは、学級集団そのものを育てることと同時に、一人一人の子どもたちが「力」をつけていくことを大切にします。

では、子どもたちにどのような力をつけていくとよいでしょうか。

人は人の中で人になる

例えば 

- 学級のルールを守る力
 - あいさつをする力
 - 人の話を聞く力
 - 自分の気持ちや考えを人の前で話す力
 - 人に感謝し、「ありがとう」が言える力
 - 負けを認める力
 - 我慢する力
 - 自分の気持ちを感じたり、考えたり、コントロールしたりする力
 - 自分のよさや苦手さがわかる力
 - 人のよさが見つけられる力
 - 人の気持ちを感じ取り、考えたり、何らかの行動をおこしたりする力
 - 自分の意見を主張する力
 - 自分の意見と人の意見がぶつかった時、折り合いがつけられる力
 - 困っている人に声をかけて助けられる力
 - 自分が間違っていた時に「ごめん」と謝れる力
 - リーダーとなる力、メンバーとなる力
 - 人の喜びを一緒に喜べる力
 - 人と一緒に活動する力
 - 自分が困った時に「助けて」が言える力
 - ストレスを上手に抱えたり発散したりする力
- など

人と共に生きること、自己の確立へ

これらの力を身につけていくには、自分に対する肯定的な感情を育てることが必要です。

学年に応じ、各学校・各学級の子どもたちにつけたい力を具体的に考えてみるのが大切です。そのことが、具体的な指導と評価を生み出します。

これらの力が一人一人につき、現在所属している学級を巣立って次の学級や社会に出ていった時、新たな集団でこの力を発揮してくれることを願いながら、その学級の集団づくりを終えたいものです。

ワークシート
p63 

環境を整える

○物的環境を整える

机やロッカー、靴箱など、自分の物や場所があることで物理的な居場所が確保され、安心感や学級のメンバーであるという自覚をもつことができると考えられます。

机の高さが個々の身体に合ったものであるか、座席やロッカーなどの位置で配慮の必要な子どもはいないか、汚れや破損はないかなど、気持ち良く使えるものであるのかも確認しておきたいところです。

また、個々のものだけではなく、黒板、掲示物、花瓶、ごみ箱など、みんなで使うものの状態も確認をして整備します。

例えば



机、いす、ロッカー、靴箱、ものかけの名前や汚れの状態
 座席の配置、ロッカーや靴箱の高さ
 黒板や花瓶の花、ごみ箱の状態
 掲示物の量・大きさ・場所

学級担任のための
ワークシートP66



<島根の教職員の声>

- ☆ 教室に居場所があることが大事です。そのために机の列をそろえます。掲示を工夫するなど、生徒が見たとき指示が通りやすい雰囲気をつくります。
- ☆ ガラスが割れる、机が壁によるというのは、学級の状態がよくないサインです。ごみ箱の中にも、子どもたちのサインが見つけれることがあります。
- ☆ 学級のできごとを掲示で示し、学級集団の成長を意識づけたり意欲をもたせたりしました。

○人的環境を整える

「担任の先生はどんな先生かな」「どんな友だちがいるのかな」と、期待と不安を胸に新学期がスタートします。教職員や友だちのことがわかると、徐々に緊張感も和らぎ、楽しいかわりも生まれてくることでしょう。教職員がわかる、友だちがわかるという仕掛けが必要です。まずは教師自身が自分を語ることで、子どもたちが教師に対して親しみをもてるようにしていきます。

例えば



朝の会、帰りの会、ホームルームで
 授業（教科、特別活動、道徳など）の中で
 休み時間

様々な方法P44
学級担任のためのワークシート
P65



教師自身のかかわりをよりよいものにしていくことも大切です。

<島根の教職員の声>

- ☆ 始業式の日、「先生クイズ」をして楽しい雰囲気担任である自分の紹介をしました。
- ☆ 休み時間には、時間をつくって子どもたちと遊ぶようにしています。いろいろな子と遊びます。

ルールをつくり、定着させる

安心・安全が揺るがないルールをつくります。人間関係、集団活動、授業、生活に関するルールの定着を目指します。定着してくると、ルールに守られながら、子どもたちは安心して動いたり自分を表現したりすることができます。トラブルも減り、人から傷つけられないという安心感の中で友だちとかかわったり、授業や活動が活発になったりします。

ルールは、教師が子どもたちを管理しやすくするためのものではなく、子どもたちの安心を支えるためのものであるという視点で、どんなルールが大切であるのか考えてみましょう。

また、担任から指示するのではなく、必要性を説明したり担任の願いや思いを語ったり、体験を通して感じたりすることで、子どもたち自身もそのルールが大事であると気づき納得できるようにします。そして、折に触れルールを守れているか子どもたちと一緒に振り返り、みんなのルールはみんなが守るという意識・意欲がもてるようにするのも大事にしたいことです。教師自身もルールを守り、子どもたちのモデルとなります。

学年や学校で話し合い、教職員が協力して取り組むことは、ルールの定着を図る大きな力となります。

例えば



給食や席替えのルール

学習のルール

聞き方、話し方のルール、話し合いのルール

日直や当番活動のルール

校内研修用ワークシート
P54、55

<時間を守る～まずは規律から～>

大切にしたいルール：時間を守る

提示する：始業式の次の日、授業の開始とともに「時間を守る。延長授業は一切しない。授業の始まりに遅れたら遅れた分だけ延長する」と宣言した。

定着させる：最初は、業間などの後の授業は、何人か授業に遅れてやってきた。遅れた時間だけ延長しようねと言っても子どもたちは「え～」とは言わなかった。子どもたちは約束だということを理解していた。逆に、終業のチャイムが鳴ったとき、授業の展開がいいところでも、担任が、「延長しないっていう約束でしょ。次の時間にやればいいの」と言って終了した。子どもたちは最初は不思議そうな顔をしていたが、だんだん担任を信用していった。

* 担任への確固たる信頼感を基盤に学級の中に安心感が生まれ、規律とともに力を注いだ授業へも、子どもたちは落ち着いて参加し、意欲を持って取り組み出しました。

『生徒指導・学級経営上の課題への取組～県内の公立小・中・高等学校の実践に学ぶ・事例集第二集～』

「信頼感を基盤にして学級を立て直していく」より（島根県教育センター平成24年3月）

「個」とつながる、「個」と「個」をつなぐ

まずは教師と子どものつながりをつくることから始めます。自分に関心を持ち、認めてくれる教師の存在は、子どもにとって大きな安心につながります。つながりができることで、困ったときにも相談しやすくなります。一人一人とあいさつを交わす、休み時間や授業の中で個別に声をかける、一緒に遊ぶ、一緒に給食を食べるなど、いろいろな場をとらえてつながりをつくっていくことができます。日記や学習ノートなども活用できます。

例えば



一人一人に声をかける、話を聴く、一緒に遊ぶ、給食を一緒に食べる
日記、ノートやプリントへのコメント

「一人一人と関係を築きながら、集団を育てる」より

- ・ 人間関係ができていないのに指導や指示は通らない。そのためは、子どもたちを理解していくことが必要だと思いました。
- ・ 何かあったときは、子どもの感情が冷めないうちに、子どもの話を聴きました。説教するのではなく、とにかく聴くようにしました。子どもたちのことを分かろう、認めていこうと思いました。
- ・ 子どもたちは、1対1で話すとき心を開き、自分の思いや考えを話しました。
- ・ 一人一人への指導と集団への指導をごっちゃ混ぜにしないようにしました。
- * 教師の指示や指導が通りにくく学習の成立が困難な学級を、子どもたち一人一人と信頼関係を築きながら学級をまとめていった実践です。

『生徒指導・学級経営上の課題への取り組み～県内の公立小・中学校の実践に学ぶ・事例集～』

(島根県教育センター平成22年3月)

教師と一人一人の子どもとのつながりができると、それを支えとして、徐々に子どもと子どもをつないでいきます。授業の中で隣の席の友だちと話し合う活動を取り入れるなど、2人のかかわりから始めていくとよいでしょう。相手を替えながらいろいろな友だちと触れ合えるようになります。そして、グループ活動等で、人数を3人、4人と増やし、子ども同士のかかわりを広げていきます。

ねらいをもって、構成的グループエンカウンターを取り入れることも効果があります。

様々な方法P47. 48

<島根の教職員の声>

- ☆ 友だちを大切にすることについては、まず隣の人を意識し大切にすることから始めます。大切にしたりされたりする心地よさを感じさせたいです。
- ☆ 高校で担任をしています。4月のうちに、5分ずつでもまず生徒一人一人と面談して話を聴くことをしています。

毎日の授業で学級集団づくりをする

学校生活の多くの部分を占めるのが授業です。授業時間は子どもたちに大きな影響を与えます。授業の中では、知的な力を獲得するだけでなく、自分を表現したり他者の思いや考えに触れたりして一緒に活動する場面がたくさんあります。子ども一人一人の成長を保障する場であると同時に、教師が子どもとのつながりを築いたり子ども同士のかかわりを育てたりする場にもなります。教科のねらいとともに、学級集団づくりの視点をもって授業を考え工夫していくことで、子どもたちが自信や力をつけたり人とかかわる良さを体験したりできるでしょう。

○「わかる」授業、「楽しい」授業をめざす

落ち着いて授業に向かうためには、学ぶ楽しさやできた喜びが感じられることが大切です。わからないことが積み重なった子どもは、ストレスを溜め、離席したり他の子どもたちが落ち着いて学べない状況をつくったりすることがあり、他の子どもたちもストレスを感じるようになります。自信を失くし、人とかかわったり登校したりするエネルギーが減少することも心配されます。忙しい毎日ではありますが、教材や学習の形態を工夫するなど「わかる」、「楽しい」授業をめざしたいものです。

例えば 

座学だけではなく、体を動かす活動も取り入れる
子どもへの声掛けなどの支援、そのタイミングを考える
学習の中で役割をもたせる

○子どもたちのかかわりを育てる

学習の中で、自分の考えを伝え合う活動は、子どもたちがお互いを知り合うことのできる場です。自分で発言することがあまり得意ではない子どもも、文や絵などで表現する機会があります。教師が子どもの思いをその子どもに代わって伝えることで、みんなに分かってもらえ、自信をもつこともできるのではないのでしょうか。また、ペアやグループでの学習では、いろいろな友だちとかかわることができます。体験学習は、共通の体験を通して思いを交流することができます。

学級や学習のルールに守られ安心できる中で、子どもたちのかかわりを育てるという視点を大切にしましょう。

<島根の教職員の声>

- ☆ 作文を学級づくりの柱と位置付け、2日に1度は作文を書かせるようにしました。その作文から、「友だちはこんなふうに思っているんだよ」ということを伝えました。その子どもの良さを伝えました。
- ☆ 教材研究をし、1時間1時間の授業をしっかりしようと心がけました。特に力を入れたのは板書です。毎時間板書計画を立てて授業に臨みました。授業に力を入れたことで、子どもたちも落ち着いて学習するようになりました。忙しくても継続して行いました。
- ☆ 授業を通して集団作りを行うには、教科担当との連携が不可欠です。多くの教員がかかわることを強みと考え、学習規律など大事にしたいことを共通理解しながらみんなで育てます。

リーダーを育てる

学級集団づくりでは、子どもたちの中からリーダーを育てることが大切です。子どもたちが主体的に考えて学習や活動を行い、自分たちの問題を解決していきながら成長するためには、リーダーの存在が必要です。学級の自治的・主体的な活動が、リーダーの存在により促進されます。

ただ、就学前に異年齢集団で群れて遊び、リーダーの姿を見てきた経験がなかったり、リーダーとなることが“目立つ”ことであると認識し、それを怖れる気持ちが強かったりする現代の子どもたちであることをよく把握して、リーダーの育成を丁寧に行う必要があります。

何か発言し行動すると、攻撃されたり、誰も一緒に活動してくれなかったりしたら、安心してみんなの先頭には立てないでしょう。まずは、ルールに守られて傷つけられない安心感のある学級風土をつくり、それに支えられた中で、子どもたち同士のかかわりと協働性を育み、リーダーを育てていきます。

学級担任のためのワークシートP67

○ 段階を追って育てる

- ・教師がリーダーとしてのモデルを示す、上学年のリーダーの姿を意識して見させる。

リーダーのモデルを見せていくことが、リーダーになってみようという意欲やリーダーとしての行動の見通しをもたせることにつながります。

- ・それぞれの活動で、具体的にリーダーの仕事やメンバーの仕事を提示する。

- ・ソーシャルスキルトレーニングとして、リーダーを育てるプログラムを実施する。

スキルとして、リーダーやメンバーの学習をすることで、リーダーをやってみようという意欲や自信につながると思います。

○ リーダーを決める時間と方法を大切にする

どんなリーダーが望ましいのか、そのリーダーを支えるためにはメンバー（フォロワー）としてどう行動すればよいのかを時間をかけて話し合います。その活動により、子どもたちが安心してリーダーをやりたいという雰囲気をつくることができます。

この活動でリーダーとして育みたいという子どもがあれば、前もって声をかけて、教師の考えを伝えて話し合うこともステップとして大切です。

○ 一人一人の得意なことを生かし、リーダーとして活躍できる場を作る

年間を見通し、誰もが一度は活動のリーダー（実行委員など）を経験できるようにします。

<島根の教職員の声>

☆ リーダーと思える子どもが、子どもから見た場合と担任から見た場合が違うことがあります。

子ども同士の関係をきちんとつかんでおくことも大切だと思います。

☆ 小学校では、中学年から「企画」という経験をさせるとよいと思います。4年生になると、

教師の手を借りなくてもある程度計画的な活動ができます。

☆ 中学校1年生は、誰がリーダーかが重要です。リーダー育成を基盤に学級をつくります。

☆ 高校では、希望を調査しながらも、教師が、核になる子に働きかけて学級をつくるとよいと思います。行事は集団行動、リーダーシップが必要です。何かあると中心になって働く、ムードメーカーも大切です。

教職員みんなが参画する

学級集団づくりの目的は、子ども一人一人の育ちを支えることで、教師が学級を管理しやすくするためではありません。大切なことは、子どもたちの成長を支えるために居心地の良い集団づくりをしていくということ、教師一人一人が意識していることです。この章でポイントとしてあげたことは、決して新しいことではなく、これまで当たり前実践されてきたことでしょう。それを集団づくりという視点から意識して行うということ、すなわち、教師が「その気」になって「本気」で取り組むということです。

そして、「その気」「本気」を支えるのは教職員のチームワークです。学級集団づくりは、学級担任だけで取り組むものではありません。担任とともに、教科担当や学年部をはじめとする教職員みんなが学級集団づくりに参画します。そのためには、子どもたちの良いモデルとなる教職員集団であることも大切です。うまくいかないことがあっても、職員室で弱音が吐け、悩みを聞いてもらえると、また立ち上げられることもあるでしょう。教職員一人一人が温かいまなざしで大事にされ、認め合える、支え合える集団でありたいものです。

さらに、個や集団の成長を1年間という枠だけではなく、それぞれの学校を卒業する頃、または社会へ出る頃を1つの目標として考え、協働性を発揮しながら連携して取り組むことも必要でしょう。

例えば



考える時間を持つ・・・新年度の始まりに、各学期の始まりに
職員室で話題にする、学年部会や職員会で話し合う
職員の間人関係をよりよくするための研修を行う
校区の学校と情報交換をする

様々な方法P44
校内研修用
ワークシート
P53~60

<島根の教職員の声>

- ☆ 中学校での大きな集団を見据えて、新しい人ともかかわる力をつける必要があると思います。そこで、全教職員で、コミュニケーションの力や意思表示ができる力を育てようとしています。他の小学校とも交流し、自分でかかわる場面を作り、それについて振り返りもしています。
- ☆ 大人がそれぞれの価値観でかかわると子どもは揺れてしまいます。ベクトルを同じ方向に合わせておくことが大切です。また、子どもが少ないとよく見えるので、大人がでしゃばりすぎるときがあります。大人が出ていくところと子どもに任せるところを共通理解しておきます。
- ☆ 支援を必要とする子どもが何人もいるとそこにかかわることが増え、その間、他の子どもたちは待っていることとなります。担任一人では全体が見えにくくなってひずみが生じ、それまでがんばっていた子どもから不満が聞こえるようになります。複数の教職員でかかわることで担任も子どもたちも元気になります。
- ☆ 大規模校では、学級の中だけでは収束しません。部活動の関係、他のクラスとの関係が起きてきます。どう歩調を合わせて解決していくかが難しいです。同じものを大事にできる学年組織であること、そして、お願いできる関係をつくっておく必要があります。
- ☆ うまくいかないようなことがあっても、みなさんが聞いてくれる、出せる職員室。全部聞いてもらえる。そうするといろんな人がアドバイスしてくれます。

保護者の理解を図る

子どもたちの安心・安全を支えたり、認められる喜びを感じ自信を育んだりするうえで、保護者も大きな役割を果たします。教師と保護者が手を組み協力することで、子どもたちは安心して自分の力を発揮することができるでしょう。

学級通信や懇談といった機会を捉えて、教師の願いや考え、子どもたちががんばっている姿、乗り越えようとしている課題などの情報を発信し、保護者とともに子どもたちの成長を支えていくことも心がけます。

また、保護者は、学校の出来事を語る子どもを通して担任や学校を知ります。日頃の子どものかかわりは、保護者との信頼関係をつくるという視点からも大切です。

そして、時には保護者の思いに耳を傾け、ねぎらいと感謝の気持ちを伝えながら、保護者とのつながりを築いていきます。

例えば

学級通信で
学級懇談、個人面談で
連絡帳で
部活動の送り迎え、大会の会場で

様々な方法 P49

<島根の教職員の声>

- ☆ 最初は、何かあったときだけ連絡帳で伝えていましたが、そうするとどうしても悪いことが多くなってしまいました。途中からいいことも頻繁に伝えるようにしたら、保護者からも子どもへの思いや見方などいろいろ伝えてもらえるようになりました。子どもとのかかわり方や支援の仕方などたくさんのことを保護者から学ぶことができました。
- ☆ 保護者から、「がんばったわが子へ」等のテーマで一行詩を書いてもらい、学級通信に載せています。一人では子どもの成長を見つけられないと思っているので、助けてもらっています。
- ☆ 学級通信をこまめに出し、保護者に、担任について知ってもらったり思いや願いを発信したりしました。トラブルが発生したときは、内容を直接会って伝えることも心がけ、関係づくりに努めました。
- ☆ 人間関係のトラブルが続いている学年でした。保護者も忙しく、子どもたちも語りたがらない年代です。学校は、子どもたちの実態を保護者にきちんと説明するよう心がけました。保護者は、そんな学校の働きかけに応じ、何かあると保護者会に積極的に参加し、机を「口の字」にして話し合いました。そして、いろんなアイデアを出してくれました。教職員集団と保護者という大人が本気になったことは、思春期の子どもたちにも届いたと思います。
- ☆ 保護者も忙しい中での子育てでいっぱいになっています。校長先生と一緒に、そんな大変さも聴かせてもらいました。学校の願いを伝えると、はじめは投げやりな態度をとられたこともありましたが、わかってもらおうと伝え続けたら、忙しいのですとというわけにはいきませんが、学校に来てくれたり、子どもたちの話を聴こうと努力したりしてもらえるようになりました。

小学校1年生の学級集団づくり

ドキドキの1年生～学校生活の基盤づくり～

小学校1年生って・・・

小学校入学への期待と不安が大きく入り混じった1年生。新しい場所・新しい人・新しい生活への期待と不安、そんな思いをもって入学してくる子どもたちです。

この時期はまだ幼さが残り、自己中心的な面をもって、「自分を見て見て」と、注目を集めたい、認めてほしいという気持ちもいっぱいです。

しかし、エネルギーは大人以上で、おもしろいと感じればどどん力を発揮する頃です。「自分っていいぞ!」というイメージをもちやすい時期でもあります。

また、子ども同士の人間関係はまだ希薄で結びつきが弱く、担任との関係が中心です。担任への依存と尊敬の念がみられます。

◎まずは安心感を支える環境を整える

自分の席はどこかな、担任の先生はどんな人かな、朝学校に着いたら何をすればいいのかな、トイレに行きたくなったらどうしよう・・・小学生になったという喜びとともに、初めての場所や人、生活に、不安な気持ちも抱えている子どもたちです。同じ幼稚園や保育所等から入学した子どもがいなくて、知らない人の中、心細い思いをしている子どももいるでしょう。これから始まる学校生活が楽しいと感じられるよう、まずは丁寧に安心・安全を確保し安心感を支えることから始めましょう。

例えば



物理的環境を整える(清潔、安全、落ち着いて過ごせる教室環境)

・・・机やいすの大きさ、座席やロッカーなどの場所

教室のごみ箱、黒板、掲示物、花瓶などの状態

人がわかる：担任の先生、友だち、学年・学校にいる人

生活の仕方がわかる：生活時程、トイレの使い方、給食、掃除、登下校

共通ポイントP13

学級担任のためのワークシートP65、66

◎行動のよりどころとなる基本的なルールの定着を

ルールがあることで行動の基準ができ、それに守られながら子どもたちは安心して生活することができます。担任への依存と尊敬の念が強いこの時期は、担任が提示するルールは絶対です。担任がリーダーシップを取りながら、どの子どもも公平で安心して暮らせるルールやマナーを教えていきます。ルールが定着することは、様々な学びを保障することにつながります。

例えば



学習のルール：聞き方、話し方、学習道具の準備の仕方など

生活のルール：あいさつ、遊び方、提出物の出し方など

共通ポイントP14

校内研修用ワークシートP54、55

◎役割をもたせる

役割をもつことで、教職員や友だちの役に立って感謝されるという経験ができ、自分が学級においてかけがえのない存在であることを実感できます。また、子どもの社会性を育て、集団づくりの基礎となる“責任”などを学ぶ体験ができます。役割を遂行するためには、自分の気持ちや考えだけでなく、友だちなど他者の意見を聞いたり気持ちを想像したりし、他者の存在も意識するようになります。係活動など、まずは一人一役からスタートし、任された仕事をやり遂げた達成感が味わえるよう支えていきます。

例えば 

当番活動、係活動

学級担任のためのワークシート
P67 

◎つながりをつくる

エネルギーがいっぱいで、何でもやってみようと思える1年生。そんな気持ちとパワーを発揮していくには、いつも温かく見守ってくれる人がいるという安心感が重要です。まずは、担任が一人一人の子どもとつながりをつくり、担任自身の人とかかわる力を発揮するときです。

そして、担任と子どものつながりを支えにしながら、子ども同士のかかわりをつくり、子どもと子どもをつないでいきます。教科のねらいとともにかかわりを育むという視点をもって授業をし、給食や遊びなどの日常のかかわりを大切にしていくことと合わせて、計画的に構成的グループエンカウンターなどの学習も取り入れ、かかわる力を育てていくことも必要です。こうして育まれた力を生かし、子どもたちは、自ら人とかかわっていかうとしましょう。次の新しい出会いでの自信につながります。

例えば 

担任とつながる ; 授業、休み時間、給食時間に

日記・連絡帳を利用して

担任のかかわる力を磨く

子ども同士をつなぐ ; 遊びを通して、授業や行事の中で

構成的グループエンカウンターなど

共通ポイントP15
様々な方法P47、48 

<島根の教職員の声>

- ☆ 低学年は、とても大事で、集団としてのマナーを教える良い時期と考えています。例えば「友だちが話しているときは静かに聞こう」などです。実際にそうして聞いてもらう心地よさも体験させることを大切にしています。あいさつも大事にし、丁寧に場を捉えて指導します。
- ☆ 当番活動を通して、責任（自分の仕事はちゃんとやる）と受容（相手を受け入れ、困っているときは助ける）を育てます。働くことで、人とかかわりや知識・技術を学ぶことができます。感謝をされ、心地よさも体験できるのではないのでしょうか。働くことは、子どもにとって得になることです。
- ☆ 友だちを大切にすることについては、まず隣の人を意識し大切にすることから始めます。大切にしたりされたりする心地よさを感じさせたいです。
- ☆ 言動が気にかかる子どもにばかり声をかけがちにならないよう、「当たり前に行っている子ども」を褒め、“ちゃんとあなたも見ているよ”というメッセージを伝えます。どの子どもにも公平に目をかけることを心がけています。

小学校2年生の学級集団づくり

慣れて安心2年生～「友だちっていいな」の体験を～

小学校2年生って・・・

学校生活にも慣れ、次第にその子らしい姿を見せるようになります。1年生の「お兄さん・お姉さん」になったという誇らしい気持ちももっています。

また、他人の立場を認めたり理解したりしようとする態度や、よりよい学級生活を築こうとする自主性なども次第に高まって、学級の仲間とともに、規律ある集団生活を楽しむようになり、小集団での協同的な活動ができるようになってきます。きまりを守ろうとする構えや、友だちを注意しようとする気持ちが強くなるので、独りよがりの判断をおさえ自分の気持ちをコントロールする基盤づくりの時期であるとも言えます。

◎友だちと一緒に・・・協同性を育む

一人一役から1つの仕事を2～4人で分担することもできるようになってくるので、子どもたちが計画・運営することを支え、子ども同士の支え合いを育みます。

係活動やお楽しみ会などのイベントも、1年生での経験を生かし、自分たちで計画できるようになってきます。授業の中でも、ペアやグループによる協同学習も楽しく経験できるとよいでしょう。

友だちと一緒に活動することで、支え合う気持ちよさを感じたり、わがままを抑えて互いの思いを確かめながら折り合いをつけていくことを学んだりします。

2年生になった喜びとともに、(先生にちょっとアドバイスしてもらったけど)自分たちでできた、やり遂げた、成功させたという体験を、そして、みんなで作業することの楽しさや力を合わせることで仕事がかどることを知る機会を提供します。

例えば



教科の学習の中で、特別活動で
学級の係活動、学年や学校の行事で
1年生とのかかわりで

様々な方法

P46、47、48

学級担任のためのワークシート

P67

◎大人への依頼心はまだまだ強いけど、主体性を育て

1年間過ごしたことで学校生活がわかり、自分らしさも発揮しながら元気に活動し始めますが、まだまだ大人への依頼心は強く残っている2年生です。困ったときや友だちとトラブルになったときなど、「先生、〇〇ちゃんが～」などと訴えてきます。ただ単に相手の子どもを叱ってほしかったり、代わって解決してほしかったりというのではなく、相談するという側面も見られるようになります。困っている気持ちを受けとめたり一緒に考えたりすることもしていき、子どもが主体的に動く経験を積み重ね、自信につなげていけるとよいでしょう。

◎他者を見る目が柔軟で肯定的、多様な人とかかわる体験を

2年生の友だち関係は、まだ流動的です。他者を見る目が柔軟で肯定的に受けとめようとする
ことができる時期です。あんなにさっきまで怒っていたのに「ごめんね」と言われると「いいよ」
とすぐに受け入れ、また遊ぶ姿も見られます。友だちがうまくできることを「わあ、すごい」と
素直に賞賛できます。「世話をする」「世話をされる」という立場も固定的ではなく、活動や場
面等によって入れ替わることも多く、対等な関係でもあります。

この時期に、関心をもって友だちを知ろうとする機会をもつこと、そして、多様な人（友だち）
とのかかわりから、人を受け入れたらトラブルを通して折り合いをつけていったりする経験をし
ていくことは、これから先により良い人間関係を築く力となります。

例えば



朝の会、帰りの会で
スピーチ、質問コーナー、ミニSGE
授業の中で、特別活動で
遊びを通して

様々な方法
P46、47、48

◎自分の気持ち 友だちの気持ち

友だちとのかかわりが増える中で、少しずつ他者が自分とは異なった考えや気持ちをもつこと
があると気づけるようになります。他者の視点に立って考えられるようになると、トラブルにな
ったときも「悔しかったんだね」「悲しかったんだね」と相手の気持ちを推し量って折り合いを
つけることができるでしょう。

様々な場面をとらえ、自分の気持ちを見つめたり友だちの気持ちを考えたりする機会を大切に。

例えば



国語の学習で、特別活動で
授業や活動の振り返りで
トラブルが起こったときに

様々な方法
P46、47、48、49

<島根の教職員の声>

- ☆ 自分を見てほしいという自己主張が強く、時には攻撃的な態度を見せる子どももいます。「それ
それいいところがあるよ」と伝えることを心がけました。
- ☆ 2年生はパワーがあります。そのパワーを生かしてみんなで取り組む活動を計画し、その中で
個を生かす場も考えました。最初は教師がルールを敷かないとできないことも多いのですが、経
験を重ねて力が伸びると、役だけ与えれば自分で考えるようになります。こちらから与えるところ
と子どもに任せるところを考えていきます。任せることで意欲をもちます。
- ☆ 落ち着かせようとして厳しく指導しすぎると、不満をもって爆発してしまいます。子どもは、
自分が落ち着いて、やっと人が受け入れられると思います。読み聞かせなどをして落ち着く経験
をしていきました。
- ☆ どんな指導技術よりも、教師と子どものつながりがベースだと思います。学級づくりは人づく
りで、人っていいなと思えることが基盤です。

小学校3年生の学級集団づくり

わんぱく盛り3年生～ギャングエイジを大切に～

小学校3年生って・・・

ギャングエイジと言われる頃。

一人一人の興味・関心は分化し、活動が活発に、行動範囲も広がります。

気の合う同性の友だち同士で結びつきの強い集団をつくり、自分たちだけのルールで行動し始めます。凝集性の強い集団の中に所属しながら、遊びの中で友だちとの付き合い方や集団生活の仕方など学んでいき、後の社会性発達の基礎を築く時期です。

しかし、集団の中で上下関係の序列ができ、自己中心的な行動を示す子どもが現れたり、グループ同士で対立したりする姿も見られ、学級としてのまとまりが育ちにくい時期でもあります。

◎一緒に遊んで子どもを知る、子どもとつながる

気の合う友だちと行動することの楽しさを覚え、休み時間にも一緒に集団をつくって遊ぶことが多くなります。その集団の中では力関係が生じ、時にはいじめにつながることもあります。「ぼくばかり狙ってボールを投げてきます」「鬼ごっこで鬼ばかりさせられます」などと訴えてくる子どもはいませんか。普段から子どもたちの様子を観察したり、話しやすい関係をつくったりしておく、トラブルの早期発見や解決につながります。遊びの中で、子どもは心を開放しその子らしさを見せたり、子どもたちの人間関係が見えたりします。子どもを知り、一人一人とつながるために、また、固定化しがちな人間関係を広げるために、教師が子どもたちの世界に近付いて一緒に遊んでみませんか。

例えば



休み時間に

学級のイベントで

◎ルールの再構築とぶれない指導を

集団で徒党を組むことで、「この程度ならルールを破ってもいいだろう」と、教師の出方を試すような行動も見られるようになります。自分たちだけでルールをつくり、勝手なふるまいをすることもあるでしょう。集団の勢いで、とんでもない事態にまで発展することもあります。

「この先生はどんなことをすると怒るかな」「どの程度までは許してくれるかな」と子どもたちは見えています。基準を明確にして、ぶれない指導をしていきたいものです。また、学級の基準ともなるルールを、子どもたちと一緒に話し合いながらつくっていくことで、子どもたちの中に「自分たちで決めたルールはみんなを守る」という構えをつくり次の学年へつないでいきます。

例えば



学級会で話し合う

トラブルをとらえて話し合う

共通することP14

様々な方法P46、49

校内研修用ワークシートP54、55

◎トラブルは問題ではなく、成長の場として生かす

まだ自己中心的なところも多く残ることから、集団の中でも集団同士の間でも、トラブルが生じることが少なくありません。子どもたちからの訴えにけんかの仲裁をしなければならないことも多いかもしれません。しかし、トラブルが起こらないようにするのはではなく、教師がすぐに結論を出してしまわず丁寧にかかわることです。トラブルを通して、自分を振り返ったり仲間のことを考えたりルールの大切さを学んだりし、個や学級の成長の場としていきましょう。子どもたちは、“ギャング”をしながら、その中で人とかかわることやルールを守ることを体験しています。

例えば



当事者と一緒に考える

学級のみんなで話し合う

ソーシャルスキルトレーニングを取り入れる

様々な方法

P 47、48、49

◎グループ活動の楽しさを経験させる

子どもたちは、教師主導の活動より、自由度の増すグループでの学習や活動に意欲的に取り組みます。仲間たちで集団をつくって行動するこの時期の子どもたちも、熱心に取り組むことでしょう。しかし、常に気の合う者たちだけで集団が固定化されると、小集団が分立して学級がまとまらなくなったり雰囲気が悪くなったりし、学習が成立しにくくなることや活動が低迷することも考えられます。多様な友だちとのかかわり、活動等の目標の明確化、ルールの決定、振り返りの実施など、配慮しながら進めていく必要があります。活動の中で見られたメンバーへのよりよいかかわりや集団への貢献など、取り上げて認めていくことも大切にしたいことです。

この時期にグループ活動の楽しさやその成果を経験させることは、これから先の学年でも、よりよい集団をつくり進んで人間関係を築こうとする意欲を育てることにつながるのではないのでしょうか。

例えば



教科の授業、特別活動、総合的な学習で

学年や学校の行事で

係活動で

様々な方法

P 46、47、48

<島根の教職員の声>

- ☆ 中学年は、しっかり経験させることが大事です。体をつかって動くことをさせます。
- ☆ 集団意識が出てトラブルが増えます。予防線を張ってトラブルを避けようとしがちですが、ある程度自分たちで考えさせ、自分たちで責任を取らせることが大事です。そのために、教職員は、発達段階で大事な時期であることを意識しなければなりません。特に、担任以外の教職員の意識や協力が重要です。トラブルがあることを非難するばかりでは、ギャングエイジが成長の場とはならず、担任のエネルギーも失われます。
- ☆ 目立つ子の足を引っ張る子ども、マイナスのところがかかわる子どもが出てきます。目立てない子どもが認められるように気を配り、地味な努力を認めていきます。

小学校4年生の学級集団づくり

安定感のある4年生～仲間とともに育つ～

小学校4年生って・・・

自我が育ってきていますが、まだまだ素直で、大人の指導を受け止められる時期です。思考形態は、具体的なものから抽象的なものへ変わります。友だち同士、ことばでやりとりして確かめ合うこともできるようになってきます。

集団の目標の達成に主体的にかかわったり、協同活動に取り組んだりして、リーダー的な児童を中心に、教師の力を借りなくてもある程度の計画的な活動ができるようになり、自分たちできまりをつくって守ろうとする姿も見られます。

また、「言われてうれしいけどやりたくない」など複数の気持ちがあること、例えばうれしいという気持ちのなかにも強さに違いがあることなど、入り交じった気持ちをもつことがわかるようになり、意識して感情を認識できる程度まで成長する頃です。

男女別の小集団もつくられるようになります。

◎ことばにして伝え合い、人とかかわる力を育てる

ことばで気持ちを表現し、人とやり取りができるようになってきています。「うれしい」、「悲しい」といった単純な気持ちだけではなく、「うれしいけど悔しい」「いやだけどがんばりたかった」など入り混じった気持ちも推し量れるようになってきます。人には、「得意なところ不得意なところもある」ということもわかるようになってきます。

トラブルが起こった時には、丁寧に気持ちをことばにして伝え合う場を大切にすることで、友だちのいろいろな思いに気づき、友だちのとらえを柔軟にしたり人を受け入れる幅を広げたりできるのではないのでしょうか。トラブルに直接かかわった子どもだけではなく、ときには学級全体で考え、みんなの問題として解決しようとするのも良い経験となります。起こった事実だけではなく、なぜそうなったのか、そのとき自分や周りの人はどんな思いだったのか、そしてそれによりどんなことが生じたのかなど、丁寧に考えていきます。

協同的な活動や学習を通して、友だちと考えや気持ちを交流し、時には折り合いもつけながら協力してやり遂げるという経験も大切にしたいものです。

また、スキル学習など取り入れ、体験を通して他者の気持ちなど実感したり、大切なスキルを身につけたりできるようにするとよいでしょう。

例えば



トラブルを生かす、ソーシャルスキルの学習
道徳や教科の学習で

様々な方法
P47、
48、49

◎ルールやめあては自分たちで考え、守る 他律から自律へ

4年生の子どもたちにとってルールを守ることやめあてに向かって努力することは、まだそれほど負担ではありません。考える力も育ってきたこの時期に、自分たちの生活や行動を見つめ直

すことから始め、みんなが気持ちよく安心して生活したり活動したりするにはどのようなルールがあるか、どんなめあてをもつとよいのかを、子どもたちが主体となり、話し合っ
て決めます。そして、日々の生活の中で、そのルールやめあてと自分たちの行動を照らし合わせて振り返ったり、それらは現状に対して適切であるかなど検討したりし、みんな
で決めたことを大事にしていくという経験をさせます。自分で判断して行動する姿を支え、自信を育てるという視点ももっておくとよいでしょう。子どもたちの主体性を大事にしなが
らも、正当な、妥当なルールやめあてとなるよう、教師は学級の一員として参加し、一緒に考えていきます。

こうした経験を通し、集団の一員として貢献する意欲や態度も育てます。

例えば



学年始め、学期始めに考える
みんなが意識できるよう考える
振り返りの時間をもつ、見直す

共通することP14
様々な方法P46
校内研修用ワークシートP54、55

◎係活動で自主性と自信を育て、児童会活動の準備をする

係活動は、自主性を発揮できる場です。授業ではなかなか活躍できない子どもも、自分に任された役割の中で、認められ活躍するチャンスを得ることもできます。ほめられれば自信がつくし、頼りにされ期待されればもっとがんばろうとします。学級の中で認められ一人一人が自信をもつことは、みんながいい気分ですらせることにつながります。そして、より良い学級生活を目指し、それぞれの持ち場でアイデアを出して活動できるよう、教師は働きかけていきます。

また、働く喜びを知り、自信を持つことで勤勉性が育まれ、学習などに粘り強く向かうこともできるようになるでしょう。面倒なことや辛抱が必要なことにも踏ん張りがききます。

こうして育んだ力は、5年生から始まる児童会活動で生かされるでしょう。委員会活動も視野に入れながら、係活動に取り組みます。

例えば



係活動の時間を位置付ける
活動を振り返る、相談する
学級内に係のコーナーをつくる

学級担任のためのワークシート
P67

<島根の教職員の声>

☆ 日々の生活の中で、個別の配慮が必要な場面があります。配慮が必要なその時の状況や必要な理由、配慮を求めている子どもの気持ちなどをきちんとクラスの人々に説明し、わかっ
てもらう努力をしました。語りかけ、問いかけ、考えさせていくことを続けていくうちに、子どもたちの中からも、友だちが困っているとき手をさしのべてくれる子どもが出てきました。その子どもをほめると、その子どもがモデルとなり、困っているときは助け合う姿がクラスの中に広がって
いきました。学級の支持的風土や自治の力が育まれていったと感じています。

☆ アサーション（自分も相手も大切に自己表現の仕方）の学習を学活で行い、自分の言い方について考えました。また、『コミトレ』（NHK TV番組）を教材にした授業もしました。言い方のモデルがあり、子どもたちはそれをまねしようとしていました。いいモデルを知ることは大事です。子どもたちの中のよいかかわりも見つけて、タイミングを逃さずほめました。

一部の子どもの間関係に苦しさがありましたが、こうして学級全体に働きかけていったことで学級の雰囲気よくなり、気になっていた子どもたちの人間関係も改善されました。

小学校5年生の学級集団づくり

ようこそ思春期5年生～揺れに付き合いながら～

小学校5年生って・・・

自分探しと自分づくりの時期に入ります。

学級全体としては、まとまった活動ができるようになり、集団としての実践や自分の言動について振り返り、改善するなどしてよりよい生活を築こうとする意欲が高まります。

しかし、思春期にさしかかるこの時期は、仲間集団からの評価を気にし、親や教師が一方向的に指示や命令をすると無視したり反抗したりすることがあります。他者との比較にも関心が強く、公平な扱いをしない教師に対して反発心をもったり、友だちと比較して自信をなくしたりし、悩みや不安を感じるようにもなります。成長の個人差や男女差も顕著になります。

◎6年生をモデルに高学年としての役割を自覚させる

委員会にも参加し、高学年という意識が芽生えてきます。しかし、6年生のもとでの活動で、責任感はまだ弱くやや自由な姿も見られます。「次は自分たちが」という自覚を持ち、6年生のよき補佐役として活躍できるよう促します。やがて、3学期には6年生を送る会の企画・運営や卒業式の準備など、自分たちが学校のリーダーとしてのバトンを引き継ぎます。1年間の見通しをもち、どの時期にどの活動でどんな役割を経験させるのか計画し、最高学年に向かって大人心を育みながら集団づくりをしていきます。

例えば



学年の活動で、学校の行事で、委員会で

共通すること P17

様々な方法 P46

学級担任のためのワークシート P67

◎公平・公正な態度で信頼関係を再構築し反抗期に付き合う

大人の影響が薄れてくる時期で、教師から一方向的に指示しても、無視したり反抗したりする姿も見られるようになります。叱られても、「みんなやっている」と反論するなど、善悪の物差しが仲間集団のものになっています。強い態度で指導したり罰を与えたりすると、仲間と結束して反抗することもあります。

まずは、子どもとの信頼関係を築いていくことが大切です。そのためには、子どもたちの言い分を聴くことを心がけます。そして、「どうしたいか」「どうするとよいのか」、納得を積み重ねます。また、子ども同士比較したり同じ子どもばかりほめたりすると、「えこひいき」と感じるなど反感を招くこともあります。ほめるときは、個別に、具体的にほめるとよいでしょう。公平で公正な態度や正当な根拠に基づいた一貫性のある指導を心がけます。信頼関係ができると忠告や助言に耳を傾け、期待にも応えようとするでしょう。

例えば



言い分を聴く、知る：個別の相談、学級会
日記、作文など
公平・公正な態度：根拠・規準を示す
学年部で話し合う

共通すること P15、18

様々な方法 P43、44

校内研修用のワークシート
P57、64

◎目をかけ気にかけて、そっと声かけ

思春期にさしかかると、些細なことで友だちとの関係が壊れたり友人への不信感をもったりして不安を感じるようにもなります。数人の親しく強い結びつきのグループを作り、グループ間でトラブルが起こることも少なくありません。グループの中で苦しい思いをしている子どももいます。男子より成長の早い女子には特にこのような傾向がみられるでしょう。

日頃からグループの様子や個人の様子を観察することが必要です。そして、気になる子どもには、友だちのいない所でそっと個別に声をかけ、心配していることを伝えて、中立の立場で話を聴くようにします。注意が必要な場合は、くどくど言わないこともポイントです。また、いろいろな友だちとかかわらせたり、エクササイズ等を取り入れたりして、グループの枠を柔らかくすることでトラブルの予防にも努めましょう。

例えば



観察、日記

アンケートQ-U、いじめに関するアンケート等

構成的グループエンカウンター

共通することP15、18
様々な方法P43、44、
45、47、48
学級担任のためのワークシート
P62、64

◎仲間の温かいまなざしで自尊感情を支える

友だちからの評価が重要になってくる時期です。「自分は友だちからどう見られているか、友だちに受け入れてもらいたい、認められたい」という思いをもちます。友だちにどう見られているかに注目することで、自己理解を深めていきます。そのため、友だちと比較して劣等感をもち、自尊感情を下げてしまうことも少なくありません。時には、自分の自尊感情を守るため、他の子どもを引き下げようとする行動が見られ、いじめ等につながる心配もあります。

他者を引き下げなくても、「自分はみんなから認められているなあ」と感じられるよう、子どもたち同士が互いに認め合える場を作っていきます。「先生は、ぼくたちを信じてくれている、認めてくれている、期待してくれている」と感じられる教師のかかわりも必要です。

「短所もあるけど自分っていいぞ」と肯定的に思えること、人との温かいかわりをたくさんもつことは、これから揺れ動く思春期を歩んでいくエネルギーとなるでしょう。自分に自信があれば、自分の物差しで判断し悪い誘惑に同調することはありません。

例えば



朝の会、帰りの会で

授業の中で、イベントで

構成的グループエンカウンターを取り入れて

様々な方法P45
校内研修用のワークシート P58
学級担任のためのワークシート
P64

<島根の教職員の声>

☆ 自分たちで決めた学級目標を、常に念頭に置いておくようにしています。いちいち指示するのではなく、考える時間を保障して一緒に考えます。そこに付き合うことが大事だと思います。自分で考えて行動させ、次につながるようにします。プライドも大事にしてやりたいです。また、追い詰めないで、逃げ道を作っておくことも大切だと思っています。ただし、生命にかかわること、人の心を傷つけることについては、しっかり指導します。

☆ “責任論”や“なければならぬ論”では、子どもは離れます。5年生は、「先生に近付きたい」という思いはもっています。教員の考えが石垣のようにガチッとしていると近寄れないので、“できた”を認めることと“遊びとゆとり”が大事だと思っています。

小学校6年生の学級集団づくり

最高学年6年生～リーダーとしての役割と責任を～

小学校6年生って・・・

小学校生活の集大成の時期。学校全体を集団としてとらえて最高学年としてのリーダーシップを発揮しようとする意識や態度も育ち、役割や責任を自覚して活動するようになります。

論理的に「何をどうすべきか」「どうありたいか」を考え、自分の立場だけではなく他者の立場も尊重して判断できるようになってきます。

しかし、思春期特有の不安定な感情が大きくなり、人間関係に悩んだり、先頭に立って行動することに消極的になったりすることもあります。中学校生活の準備期でもあり、中学校生活への不安を感じる子どももいます。

◎リーダーとして 下学年からあこがれの存在に

6年生になると、学校行事や委員会、掃除など様々な場面で、大きな役割を担い活躍することを期待されます。下級生に感謝されて活動がうまくいったときは充実感を味わい、「6年生ってすごいなあ」「ぼくたちも、あんな6年生になりたいなあ」とあこがれの目で見られると、自己肯定感も高まります。

役割や責任を果たしたりリーダーシップを発揮したりできるよう、日頃から教師が一人一人のがんばりを認め、それを学級でも伝えていくことで、子ども同士も賞賛したりねぎらい合ったりできる雰囲気をつくります。困難なことが生じても互いに知恵を出し合って乗り越えることもできるでしょう。リーダーとしてなかなか自信をもてない子どももいますが、学級集団の力でそれぞれのリーダーシップを支えていけるようにします。

例えば



活動（行事）のめあてを話し合っ共有する
困っていることなど出し合い相談する場をもつ
がんばっていることを朝の会等で伝える
委員会の提案等にはみんなで協力する

共通することP17
様々な方法P46
学級担任のための
ワークシート
P63、67

<島根の教職員の声>

委員会などは、学校で活躍させる場です。先生の下請けをするわけではありません。当番活動など、やらされたと感じるものだけではなく、子どもの主体性を大事に活動したいと思っています。これは、学校として、教師みんなが意識しなければならないのではないのでしょうか。

また、6年生は、「どんなクラスにしたいか」だけではなく、「どんな学校にしたいか」と考える視点も大事にしたいです。

教師の机のまわりに集まってくる子どもと他愛ないおしゃべりも大事な時間です。ぼろっと本音もれることもあります。一緒に笑う時間も意義あることです。つながりをつくります。

◎自治力を育てる

自分の立場だけではなく他者の立場を考えたり、物事を論理的に筋道を立てて考えたりできるようになります。学級内でトラブルが生じたときも、様々な他者の立場を考えながら判断したり解決したりできるよう、教師は子どもたちの力を信じて見守ることも必要となってきます。

自発的な活動も尊重したいことですが、発言力の強い子どもだけで決めるのではなく、一人一人の願いを聞き、話し合っって納得して物事を決める経験を大事にします。目的意識も持って活動し、事後には振り返りの時間をもって思いや考えを交流し、次の活動へつなげます。

例えば



学級会、班長会、係会

共通すること P 17
様々な方法 P 46、49
学級担任のためのワークシート
P 63、64、67

◎小学校から中学校へつなぐ

6年生になったときから、小学校生活が終わることを感じ始めます。行事一つ一つ、そして教科の授業や日々の生活の中でも、これまでとは違い、小学校生活のまとめとして意義づけられることが多くなるのではないのでしょうか。改めて小学校6年間を振り返り、自分や友だち、学級の成長を感じ、自己肯定感を高めて、不安はあるけど中学校という新しいステージへ進むエネルギーを蓄えていけるとよいでしょう。まだ見ぬ中学校での生活に対する不安も受けとめ、中学校生活の体験を試みたり情報を提供したりし、具体的なイメージがもてることでも安心できます。

例えば



授業で
行事やイベントで
卒業文集

様々な方法 P 46
学級担任のためのワークシート
P 63、64

また、自分たちは、学級や学校という集団の中で役割をもち貢献してきた、友だちと協力してよい集団を築くことができたという気持ちももてることは、中学校で出会う新しい仲間とのより良い関係を築く自信となり、居心地の良い集団をつくる意欲につながります。人とかかわるスキルなどを知っておくことも、新しい人とかかわることのできるエネルギーになるでしょう。

例えば



ソーシャルスキルの学習
協同的な学習、活動

様々な方法 P 47、48
校内研修用ワークシート P 58

<島根の教職員の声>

☆ ほめることだけが大切ではありません。つらさを支えます。高学年になると委員会や行事などで、リーダーとして様々なことを要求され、悩むことも多くなります。友だち関係、学習等で悩むことだってあります。そんなとき、さりげなく言葉をかけます。そうして信頼関係を築いていきます。

☆ 子どもたちにどんな価値観をもたせるのか、何を大事にするのか。結果ではなく、努力した姿を大事にしました。活動をするときも、見ばえやできばえではなく、子どもたちのどんな姿を、どんな成長をめあてとするのか考えます。そして、押ししたり引いたり、少し大人扱いをしたりしながらまとめるべきところは担任が出るという姿勢を心がけました。

中学校1年生の学級集団づくり

実は力をもっている中学校1年生～その力を生かす～

中学校1年生って・・・

3月下旬の小学校の卒業式から4月上旬の中学校の入学式までのわずか半月くらいで、大きな変化を経験するのが、中学1年生です。制服の着用、授業時間、教科担任制など、中学入学とともに生活の多くの面で変化が生じます。これまでの最上級生から最下級生に変わり、部活動が始まり、先輩や後輩の関係もはっきりしてきます。そして、定期試験があり、成績が目に見える形で示されるなど学習面も大きく変わります。このように、中学校1年生には、まさにそのなりたての1学期に、これまでに経験したことのない変化が、たてつけに起きるのです。

◎中学校1年生は力をもっている!!

中学校1年生は、まだサイズの合っていない学生服を着て、目をきらきらさせながら入学してきます。そんな姿を見て、上級生や教職員に「かわいい!」と幼く見られたり、「1年生は何もわからないから教えてあげないと」とお世話してもらうことが多くなったりすることはどの中学校でもよくあるのではないのでしょうか。確かに中学校のことはわからないことがたくさんあると思いますが、1年生は少し前までは小学校6年生でした。児童会、委員会の役員や、集団登校の班長、体育会や音楽会など小学校を引っ張っていくリーダーとして活躍していました。それが中学校に入学したとたん、あまり仕事を任されなくなり、責任ある役割をもたなくなってしまう。それはとてももったいないことではないのでしょうか。中学校1年生は実は力を持っているのです。

そんな気持ちで1年生をとらえ、学級集団をつくっていくことが大切です。

共通することP17
学級担任のための
ワークシートP67

◎その力を発揮させる場をつくる リーダーを育てる

1年生が持っている力を発揮させる場を作りましょう。なかなか生徒会活動の中で1年生が活躍できる場はないかもしれません。しかし、学級の中で、学年の中でならば、1年生が自分たちの考え、自分たちの力で動ける場が作れるはず。主体的な活動を取り入れていけば、学級として、学年としてまとまっていくきっかけになり、リーダーも育ていくのではないのでしょうか。このスタートがやがて生徒会にもつながっていきます。

例えば



学級の係活動 学級イベント 学年集会の運営 学級対抗レク etc.

<島根の教職員の声>

学級づくりのために、一番最初は教師の方が学級イベントを企画し、行います。すると、そのうち子どもたちが「学級イベントまたやりたいです!」と言ってきます。「しめた!」と思って、「じゃあ企画書書いて、それがOKなら時間あげるよ」と伝えます。1年生の子どもたちがいきなり企画書は書けませんので、最初は書き方を教えてやり、いっしょに考えてやったりします。そうやって学級イベントをきっかけにして、自分たちで話し合い、自分たちで動こうとするパターンができていき、お互いに意見を出しやすい雰囲気になっていきます。

◎誰もががんばろうと思って入学してくる・・・チャンス！

学力調査のアンケート結果からも中学校1年生は学習意欲が高いことがわかっています。小学校時代に勉強があまり好きではなかった子どもも、「中学校ではがんばるぞ！」と思ってよい緊張感をもちながら入ってきます。その高い学習意欲をチャンスとしてとらえ、それを生かし、学級が学習へ向かう雰囲気をつくっていくことが大切だと思います。また、学習内容も小学校から大きく変わってきます。「中学校の勉強は難しい」ではなく、その教科を好きになるチャンスととらえて、そのための努力をする機会にしてみてもはどうでしょうか。

共通すること P16

◎中学校のルールを伝える

子どもたちが新しい環境（学級等）に入ったときに、そこが安心・安全な場所であるかということは学級集団づくりの基盤になります。安心安全な場所にするためにはルールがあることが不可欠です。

例えば



時間を守る 学習規律 係の仕事 給食 掃除 提出物 etc.

また、学習規律などについては、子どもたちはそれぞれの小学校での経験をもってきています。例えば手の挙げ方や発表の仕方などです。そこで、教科担任制となった中学校において、各教科での学習規律の統一がないと、小学校で身についた学習規律の習慣はあっという間になくなってしまいます。子どもによっては、「中学校ってあまり手を挙げなくてもいいんだ」「ノートも自由でいいんだ」などと勘違いをしてしまい、学習態度が一気に乱れるという状況も生まれています。

中学校のルールを教職員で確認し、身につけさせていくことが大切です。

共通することP14
校内研修用ワークシート
P54, 55

〈島根の教職員の声〉

中学生は、友達との関係がもろく、ちょっとしたトラブルで居心地が悪くなるので、せめて担任とつながっていることで乗り切れる。個々とのつながりを太くし、担任がいれば何とかできるという安心感を子どもたちに植え付けたい。

自分の価値観に揺れる時期で、それぞれの価値観でルールを逸脱しようとする。安心感が揺れないよう教員が絶対的ルール（掃除・給食・係りの仕事）を示すことが大事。自分たちで守るという意識が必要なので、具体的なルールの内在化を促す。

◎担任と副担任、教科担当との連携が大切！

子どもたちにとって、中学校は初めての完全教科担任制。それに戸惑う子どもも多いはず。でも、それを強みしていくことが大切です。「いろんな先生と出会える」「たくさんの先生に見てもらえる」ということを生かしていけば、子どもたちの思考や心の成長は大きく伸びていくと思います。ただし、それが生きるためには、その「いろいろな先生」たちの連携が重要になっていきます。担任が「Aくんは今こういう状況です」「うちのクラス昨日こういうことがありまして…」と伝えることや、教科担当が「Bくんちょっと心配なんだけど何かあった？」「3組はすごくいろいろな意見を出すよ。」といった情報交換が行われることが、学級集団をつくっていくことに大きく影響します。

共通すること P18

校内研修用ワークシート P56 58

中学校2年生の学級集団づくり

先輩と呼ばれる中学2年生～積み重ねの時期に～

中学校2年生って・・・

中学校生活にも慣れ、中学校生活を楽しみ始めます。その一方で、学校生活の様々な現実から、自分らしさが出せず、否定的な自己像を描き始めることもあります。もう一人の自分との対話も少しずつ深まり、内向的になったり、生活に対しては、周囲の動きに流されたり、進んでものごとにかかわろうとしなくなったりもします。

小集団の中に自分の居場所を見つけようともします。同じ持ち物や行動で所属感を保ち、仲間から外されることを恐れ、集団間で互いにレッテル貼りをしたり、対立が生じたりすることもあります。上級生と下級生にはさまれ、責任感がやや薄くなったり、中途から責任が負わされることで不安定になったりしがちな時期です。

◎中2は中だるみの時期ではない、積み重ねの時期！

「中2って中だるみの時期だよ」といった声を聞くことがあります。しかし、「中2は積み重ねの時期！」ととらえるとどうでしょう。1年間の中で中学校という生活に慣れ、2年目を迎えたこの時期は様々なことにチャレンジできる、またチャレンジさせる絶好の時期ではないでしょうか。子どもたちは一見だれてるように見えることがあるかもしれませんが、しかしそれをのびのびしているととらえてみませんか。3年生になるまでのこの1年間で様々な積み重ねができるのではないのでしょうか。

共通することP14
校内研修用7ワークシートP54 55

◎ルールの確認

2年生をスタートするとき、学習面でも、生活面でも、1年生のときのルールの確認が必要です。それはクラス替えがあったり、担任が代わったりしたときには当然ですが、そうでないときにもルールの確認をしましょう。新たな学年のスタートであるということ、また中学校生活に慣れた子どもたちに安心・安全を確認する意味でも必要なことだと思います。

○ 生徒たちが安心感をもつために

担任は学級の基盤を整えるためにさまざまな策を講じたが、その全てにおいて、根底にあったのが「公平性」であった。給食、そうじ、係活動、席替えなどのルールの徹底や、教育相談、生活記録のコメント、誕生日の寄せ書き、行事での役割決めなどに公平性が貫かれていた。

生徒たちが担任に感じる公平性が信頼感となり、そして学級の、生徒たちの安心感につながっていった。また、生徒たちの中に安心感が生まれると、生徒たちが自ら動き出すことができる、それを証明している事例でもある。

島根県教育センター作成実践事例集第二集「安心感のある学級づくりを求めて」より

◎生徒の声を聞く

中学校2年目になり、子どもたちは中学校生活にも慣れ、自主的に動く力をつけてきています。また、1年生の時よりも「私たちのクラスって…」とクラス意識が高まってきます。そんな特徴を生かして「このクラスで何を大事にしていきたい？」と子どもたちに問い、子どもたちの気持ち、考えを聞き、クラスの声をまとめることが大切だと思います。先生が決めたこと、先生に言われたことではなく、自分たちで決めたことには責任が生まれてくるのです。自己決定させる機会を増やしていきましょう。例えば、学級目標を決めるときに、十分時間を取って話し合いを行い、目標を決めるまでの過程を大事にしてみてもはどうでしょうか。生徒たちの目標に対する意識が変わってくると思います。

＜島根の教職員の声＞

中学2年生は、1年生の時より周りの友だちのことを強く意識し始めます。それに伴って「〇組は・・・」という意識が強くなり、自分のクラスが団結力があることに意義を感じ始めます。だからこそ、注意するときに「〇組は学習態度が悪い」といった、クラスへのダメ出しはしないようにしています。その行為に対して注意をしたり、場合によっては後から個別に指導をしたり。逆にほめるときには「〇組で授業していると先生燃えてくるわ。」というように一つの出来事をクラス全体のこととしてほめたりします。

共通することP11 学級任のためのワークシートP61

◎先輩になる!!

中学校は、小学校時代にはあまりなかった「先輩、後輩」意識が出てきます。そして、中2になって初めて先輩と呼ばれるようになります。「〇〇先輩」とか、「〇〇さん」と1年生に呼ばれるとちょっとぶり恥ずかしいような、少し誇らしいような気持ちになります。そんな時期に「先輩」について少し子どもたちと話し合ってみてもはどうでしょうか。

例えば



「どんな先輩になりたいのか?」「あこがれの先輩は?」「後輩に伝えたいこと」etc.

共通することP17

学級担任のためのワークシートP67

◎リーダーを育てる

先輩になると同時に、2年生後半からは生徒会、部活動等を引き継いでいきます。これは直接学級集団づくりと結びつかないように思われがちですが「リーダーを育てる」という意味では学級集団づくりとつながっています。3年生から様々なことを引き継いでいく時期に教職員が「リーダーを育てる」という意識をもち、それを見据えた取組をすることは大切です。まずクラスの中でリーダーを育てる、選ぶという過程を大事にすることで、クラス全員の、また学年全員の意識が変わってくると思います。そして、それがクラスから生徒会、部活動へとつながっていきます。

まずはクラスで、目指すリーダー像を話し合ってみてもどうでしょう。

例えば



みんなから信頼されている いろいろな子と関係がとれる いろいろな立場の子の気持ちができる ユーモアがある 努力家 声大きい etc.

◎担任と副担任、教科担当、部活動担当との連携が大切!

「担任と副担任、教科担当との連携が大切」と1年生のところにも載せましたが、2年生では部活動担当も入れました。このことは全学年で大切なことですが、2年生になって部活動の中での友だち関係もその子の成長により大きく影響してくるからです。

共通することP18

校内研修用ワークシートP56、58

中学校3年生の学級集団づくり

進路決定の中学校3年生～中学を「やりきる」～

中学校3年生って・・・

中学校3年生は、義務教育の最後の1年間であるため、中学校卒業後の進路について、各自が独自の選択をしなければならない。このような人生選択は多くの子どもたちにとって、生まれてはじめての重要な意思決定の課題であり、すべての中学校3年生が乗り越えていかなければならない一つの発達課題ともいえます。

そして、小・中といっしょに過ごした多くの仲間が卒業と同時にそれぞれの道に進んで行きます。小学校卒業よりも「別れ」「旅立ち」という感が強いと思われるこの学年。

◎進路決定の最後の1年

3年生になることで、子どもたちの中の進路への意識がまた一段と高くなります。3年生の学級集団をつくっていくために、この進路への意識は大きな柱となります。自分の進路を考えることは自分の未来を考えること。個々の進路について、みんなで悩み、語り合うこともこの時期の子どもたちにとって貴重な時間になることでしょう。そして、それに向かって努力していく過程が3年生の醍醐味ではないでしょうか。

◎ナーバスになる

前述したように、3年生はそれぞれが高い進路意識をもつようになりますが、その空気の中で、自分の進路への意識がもちにくい子ども、それに苦しむ子ども、自暴自棄になる子どもも必ずいます。その子が孤立感を強めてしまわないために、また自分の進路を自分で決められるために、仲間の力、学級集団づくりが必要です。

<島根の教職員の声>

一人では自分のよさに気づけない。互いのよさを見つけ合えたり自分のよさに気づいたりできる集団にしたい。その中に担任である自分も入っていると思う。「隣の人がどんな呼吸をしているか聞こえるか」と問う。本当は聞こえないが、しんどい息づかいをしているなどわかるような仲間であってほしい。そういうことが相手を大切にするとところにつながったり、優しい心がつくられたりすると思う。

◎どういう姿で卒業したいのか～中学を「やりきる」～

3年生のスタートにまず卒業するときの自分のイメージ、クラスのイメージを考えさせます。自分の進路が決まっていることももちろん大切なことですが、中学校を卒業して新しいステージが上がっていくためには、中学校を「やりきる」ことが大切になってきます。「中学校は楽しかった、思い出がいっぱい。でも、もう中学校に自分のやるべきことは残っていない」そう思って卒業して欲しいと思います。中学校最後の1年間を、卒業していく自分のイメージ、そして3年〇組というクラスのイメージももちながら過ごして欲しいと思います。3年生スタート時に、そのイメージについて語り合

ってみるのもよいでしょう。

学級担任のためのワークシートP61

例えば



笑顔で卒業したい すっきりした気持ちで卒業したい 胸を張って卒業したい
このクラスでよかった 行きたい進路に決まっていたい 中学校は楽しかった
一生の仲間ができた 中学校をやりきった etc.

◎クラスの仲のよさ、まとまりを強く意識する

3年生は中学校最高学年。全ての活動、行事も一つ一つが「これで最後」になっていきます。そのため、自分たちでまとまろう、よいクラスにしたいという意識は、3年間の中で一番強くなります。よって、自分たちでクラスをつくっていくという意識を尊重し、任せていくことが大切だと思います。ただし、クラス意識、仲間意識が強くなっている分、うまくまとまれないときには子どもたちのいらだちもそれだけ大きくなります。教師の出番、かわりどころはどこかという見極めが、大事なポイントになります。「このクラスでよかった」「O組最高!」と思いたい子どもはたくさんいると思います。

◎「自分たちの代」意識～先輩達に負けない、後輩達に見せる～

クラス意識の高まりと同時に、3年生は「自分たちの代」意識をもちます。中学生の成長過程においてとても大切なことであり、その意識は集団のもつ魅力の醍醐味だとも言えるのではないのでしょうか。その意識が特に強まるのは、生徒会活動の他に、体育祭、文化祭、音楽会等の行事のときです。3年生の誰もが主役となり、1・2年生を引っ張っていく。先輩たちに負けたくない、後輩たちのあこがれになりたい、一部の子もたちだけでなく、みんなでそんな意識を共有したいものです。

◎担任と副担任、教科担当、部活動担当との連携が大切!

このキーワードは全学年に載せました。3年生は進路を決めていきます。部活動も引退します。1・2年生よりもより心が揺れ動くと思われます。たくさんの大人の目の連携が必要です。

共通することP18 校内研修用ワークシートP56 58

<島根の教職員の声>

3年生のクラス開きの時に、「この1年間しっかり悩みなさい」と子どもたちに言います。それは友だち関係のことも、進路のことについても、しっかり悩んで壁を越えていって欲しいという意味です。3年生は悩んで壁を越えていかないと、全校を引っ張っていく行事が越えられませんが、行事が越えられないと受験に向かえません。行事を越えるとは、3年生として「やりきった」という思いをもって終わるということです。それが3年生だと思えます。悩まないままでいると、失敗したときに「人が悪い」と言います。そうならないように、人ごとにしないために、この1年をかけて、「自分ってどうなんだ?」と自分のことについて考えて欲しいと思っています。そう投げかけておいて、私たち教師は、子どもたちに考えさせる場面、悩ませる場面をつくるようにしかけをしていきます。

高校1年生の学級集団づくり

一斉スタートの高校1年生～社会につなぐ～

高校1年生って・・・

高校は、様々な中学校から生徒たちが集まってきます。子どもたちは中学校よりもぐっと世界が広がったように感じることでしょう。

新しい友だちや教師との出会い、社会的関心の広がり、進路の選択など新しい環境や課題に直面していく時期です。また、自我の形成や心身の発達により自主独立の要求が高まることから、生徒の自発的、自治的な活動をできる限り尊重し、生徒が自らの力で組織をつくり、活動計画を立て、協力し合って望ましい集団活動を行うように導くことが大切になります。

◎高校は一斉スタート 世界が広がる

共通することP10

学級担任のためのワークシートP61

高校に入学すると、友だち関係が広がります。様々な中学校から来る子どもと出会い、新しい世界、新しい関係がスタートします。子どもたちはいろいろな思いで教室に座っていることでしょう。期待より不安の方が大きいのかもかもしれません。それを教師は理解し、中学校までの生徒一人一人の様子を把握した上で、高校での「新しいスタート」が子どもたちにとってプラスに作用するようにしていくことが大切になります。入学してから早い段階での面談も有効です。

◎相互に認め合い、高め合う集団をつくる

高校では一段と学習内容が難しくなり、教科の専門性もぐっと上がります。その中で子どもたちは自分の成績と向き合わざるをえなくなります。自分の進路に向かって、社会に出るために、一人一人が成長していくためには、自分の生き方について模索し、自分が伸びようと努力する人になって欲しいと思います。そのためには、自他がそれぞれに個性を発揮し、それを相互に認め合い、お互いに高め合おうとする雰囲気 of 学級集団づくりが必要となります。どんな集団の中で過ごすかによって、その子どもの成長は変わってきます。

例えば



年間を通じて個人面談を柱にしていく(4月は全員と5分だけでも行う)

学級日誌をクラスの交換日記として

学年集会を定期的に行き、学年として目指すところを共有する、確認する

ホームルーム活動、学校行事で役割をもって活動させる etc.

〈島根の教職員の声〉

私は、自分と生徒、また生徒同士をつないでクラスづくりをしていく方法の一つとして学級日誌を使います。日誌をスタートさせるときに、まず自分がクラスへの思いをできるだけ書きます。するとそれを見た次に書く生徒たちが、それに触発されて自分の思いをたくさん書いていくようになります。日が経つにつれ、みんなが見る学級日誌でありながら、自分の悩みや友だちへの励ましなどみんなが遠慮なく書くようになります。なかなかクラスの子と話す時間が取れない中、また、クラス全体での話し合いの時間もない中で、学級日誌を通してみんなの心がつながっていきます。

◎担任と副担任、教科担当との連携

教科担任制については中学校から慣れているものの、どの教科についても専門性が増し、一つの教科だけでも複数の先生に出会うこともあります。専門高校においては中学校にはなかった新しい専門教科が増えます。実習も入ってきます。中学校よりもよりたくさんの教職員、大人に出会います。科目数が増え、内容は専門的になっていく中で、それに戸惑う子も多いはずですが、ここでもやはり「たくさんの大人の目」を生かすことが大切になってきます。そしてそれが生きるためには、その「たくさんの大人」が連携する必要があります。担任と副担任、教科担当が打合せを行い、情報交換を続けていくことは簡単ではないかもしれませんが、高め合う集団をつくるためにはこの連携が必要不可欠です。

共通することP18
校内研修用ワークシートP56 58

〈島根の教職員の声〉

担任と教科担当がいっしょに学年部会をするときに言うことは、担任は「主に」〇年〇組を見てください、ということです。つまり、自分のクラス以外に他のクラスもみるということです。すると、子どもたちはどのクラスの先生、どの教科の先生にも質問に行ったり、相談しに行ったりします。子どもたちは先生たちと話がしやすくなり、内容によって先生を選ぶことができます。その学年にかかわる先生もどのクラスもみる、どの子もみるという意識になり、担任は、クラスを見ているのは「自分一人じゃない」と思います。そして、担任をすることが負担ではなくなることによって、多くの教員が「担任がしたい」と思うようにもなります。

◎大人にするための最後の3年間～社会に出るために～

高校とは、子どもたちにとって、大人に見てもらう最後の3年間です。大学に行くことも社会に出ることととらえ、3年後に自立できることを目指していきます。どこに進学する、どこに就職するといった自分の進路を決めていくことと同様に、社会へ出て生きていくための力を身につけさせていくことも大切なことです。

例えば



ディスカッション プレゼンテーション
活動の企画立案 行事等における役割の遂行等

共通することP12
学級担任のためのワークシートP63

○ あいさつ、そうじ、社会に出て必要な力

C先生は、授業の始めや終わりに誰よりも大きな声であいさつをする。また、身だしなみや清掃についても「きちんとやろう」とよく呼びかける。これらは、社会に出た時、当たり前ができないといけないこと、また、社会で人から一番認められることだと生徒たちにことあるごとに伝えている。

行事で協力してやっていく場面では、集団で何かをやることの魅力や大切さを語ったりもしている。勉強以外での学校生活の楽しさも味わわせてやりたいと考えている。

また、「島根を背負って立つ」というくらいのプライドをもって、自分を高めていってほしいと伝えている。

島根県教育センター作成実践事例集第二集

「普通高校で過ごす子どもたちと細やかにつながっていく」より

島根県教育センター「学級集団づくり魅力ガイドブック」

複式学級の学級集団づくり

複式学級って・・・

島根県の現状からみると小学校の約3割の学校が複式学級を有しています。

複式学級は一般的に様々な長所短所を持ち合わせていると言われます。例えば学習において、教え合い、学び合い、自主性が身につけやすい反面、異学年が別の内容を学習する場合はきめ細かい指導ができにくいなどがあります。人間関係で言えば、少人数であることから相互理解しやすい反面、競争意識や、葛藤の経験などがもちにくいとも言えます。

◎複式学級は毎年クラス替えがある

複式学級といえば、少人数であり、人間関係が固定されたイメージがありますが、実は毎年クラス替えがあるのです。そして、例えば3・4年生のクラスにおいて、3年生の子どもたちが4年生になったとき同学年のメンバーは変わらないのに、クラスの中で役割、立ち位置が変わります。

また、5・6年のクラスで、教師が6年生に話すことを5年生も聞いています。5年生に言うことを6年生も聞いています。直接言われたこと、間接的に聞いたこと、その立場立場で考えて、学んでいます。5年生が6年生になったとき、1年間6年生を同じクラスの中で見てきたので先を見通して動けます。

◎自分たちで成長を実感することができる

例えば、5・6年生の複式学級は、2年前、3・4年生の複式学級として同じメンバーでした。そうすると1年間を空けて同じメンバーになると、「3・4年生のときはけんかしてもなかなかおさまらなかったよなあ」「でも今は自分たちで解決できるよね」というように、自分たちの成長を実感できるのです。成長した自分たちをみんなで感じることは大きな自信につながります。5・6年生の学級開きの時に、みんなで3・4年のときのことを振り返ってみるのもいいかもしれません。

◎あこがれて育つ、あこがれられて育つ

複式学級の子どもたちは、隔年で上学年、下学年を繰り返していきます。

〈島根の教職員の声〉

複式だから味わえることがあると思います。例えば、同じクラスの中に、横のつながりと縦のつながりがあります。横のつながり（同学年同士）のつながりはもちろん大切ですが、縦のつながり（異学年同士）のつながりを教師が意識しておくことが大切だと思います。上の学年を下学年の「あこがれ」にできるようにしていくことが、複式学級をもつ教師の大事な役目だと思っています。下の学年は上の学年にあこがれて成長する。上の学年は下の学年にあこがれられて成長する。どちらも大切だと思います。子どもたちに「あこがれ」の具体を考えさせていきます。

クラス替えのない学級の集団づくり 少人数学級の学級集団づくり

クラス替えのない学級って・・・

島根県の現状からみると小学校で約7割、中学校で約6割の学校にクラス替えのない学級があります。専門高校では、科の約6割～7割が1学級ずつで、クラス替えがない状況です。クラス替えがない学級、少人数の学級は、課題の一つに「人間関係の固定化」が挙げられると思います。

○ 少人数の集団を担任する時に思うこと

人間関係の動きが少ない。それは子ども同士には言わなくてもわかるという良さがあるかもしれない。でも、それは変化に気づきにくいことであり、相手の良さに気づくチャンスが少ないことでもあると感じている。また、どうしても手をかけ過ぎてしまう。そんな中で、子どもたちの主体性をどう育てていくかが難しい。

島根県教育センター作成実践事例集第二集「少人数の学級をもった時に～新しい良さを見つけていく～」より

◎お互いの良さに気づかせる

B先生は、子どもたちがお互いの新しい良さに気づくチャンスを増やすために、学級独自の行事や体験をしかけている。できるだけ子どもたちに準備をさせて、そこに一緒にいて、B先生がまずは子どもたちの良さを見つけて言葉にして広げていくようにしている。

また、関係が変化しない分、子どもたちは、固定化したイメージでお互いを見てしまう。そこで、「構成的グループエンカウンター」のエクササイズを使ったりしながら、子どもたち同士がお互いを認め合う場面を意図的につくったりしている。

島根県教育センター作成実践事例集第二集「少人数の学級をもった時に～新しい良さを見つけていく～」より

◎学級の中での役割を変えていく

当番活動や係活動、学習グループ等、内容も方法もマンネリ化しないことが大切です。また、自分たちでいろいろなイベントの企画を考えてみるのもいいかもしれません。新しい企画を行うと、そこにいろいろな役割が生まれます。誰もがいろいろな役割ができるような工夫が、子どもたちの新しい面を引き出すのに有効です。

校内研修用ワークシートP58
学級担任のためのワークシートP67

◎いろいろな大人がかかわる 新しい目で見ると

クラスは変わらないが、たくさんの大人（教師、保護者、地域の人など）とかかわる機会を増やしてみてもどうでしょうか。子どもたちは日々成長していきます。しかし、固定化した見方だけで捉えられていると誰もが苦しくなります。子どもたちのメンバーは変わらなくても、まず、子どもを見る大人の目は変えることができます。担任が替わったときの新しい出会いはもちろんですが、いつも顔を合わせている大人が新しい目で見えていこうとすれば、子どもも新しい面を見せようとするでしょう。

普通高校・専門高校の学級集団づくり

高校でのちがいで・・・

高校の中でも科の違いがあり一概には言えませんが、普通高校はの大半の生徒が進学希望であり、受験が柱になっていく集団です。また、専門高校は、普通高校よりも、就職等、直接社会に出て行く生徒が多い集団です。科によって違いはありますが、比較的クラス替えがないことの方が多く、また高校に入って初めて体験する専門の学習があります。

◎受験を通し、人として成長させる

P 38では「高め合う学級集団」ということについて述べましたが、普通高校ではどうしても受験に向けての生活になりやすいようです。「受験は団体戦」と言われることもあります。お互いに助け合い、協力し合いながら受験を乗り切り、そのことを通して社会性を育てていきたいと思えます。

○ 普通高校で担任をしていて思うこと

生徒たちは、成績面で気持ちを大きく揺らす。学習へのつまずきを早く見つけて、細やかに支援していくことは、学校に適應するためにも大切。

早くから希望の大学を絞って勉強に取り組む生徒もいる。それは大切なことでもある。しかし一つのことだけを見て、視野が狭くなったり、社会に出て働くための力がつかなかったりするのは残念。だから、いろいろな可能性に気づかせたり、社会人としてできて当たり前のことを教えたりしないといけない。

島根県教育センター作成実践事例集第二集

「普通高校で過ごす子どもたちと細やかにつながっていく」より

◎常に社会に出ることを意識させながら

「高め合う学級集団」を目指すところは専門高校においても同じです。専門高校は中学校までの教科の他に専門教科が入ってきます。例えば国英数は苦手だった子どもたちでも、「専門教科についてはみんなが〇からのスタートだよ。それが得意教科になる子どもたくさんいるんだよ」といわれることで勉強への安心感、意欲がわいてきます。高校卒業後、就職する子どもも多いという状況から、常に社会に出ることを前提に、働くことを意識させながら一人一人が自分の役割を果たす集団をつくっていくことが大切になります。

○ 専門高校で担任をしていて思うこと

本校の生徒は、卒業すると県内に就職をする子が多い。希望もそうだし、現実的にもそうである。ということは、この子たちが県を支えていると思っている。だからこの子たちががんばって欲しいし、自分にできることは何かと考える。科ごとに入学してくるので3年間クラス替えはない。学級が一つになれば大きな力となってプラスに働くが、そうでないと3年間大変だろうなと思う。だから一つにしたいと思う。

島根県教育センター作成実践事例集第二集「3年間クラス替えのない子どもたちをつなぐ」より

日常の働きかけを大切にする

学級集団づくりにおける子どもたちへの働きかけは、多くの場合1学期の始業式・入学式の日から始まり、毎日の学校生活の中でなされていきます。その毎日の積み重ねを大切にしましょう。

◎目標や願いについて機会をとらえて考えさせる

年度の最初に学級目標を設定すると、子どもたちはもうわかってくれたような気持ちになってしまうことはないでしょうか。学級の子どもたち一人一人に浸透させていくためには、機会をとらえて、子どもたちの願いをもとにつくった学級目標に照らし合わせたり、教師も願いを話したりして考えさせていくことが大切です。

◎大切にしたいことを行動で示す

きれいな教室にすることを大切にしたいと思い、子どもたちにもそれをルールとして求めるのならば、度々教室へ様子を見に行き、子どもたちに評価を伝えたり教職員も一緒になって整頓したりすることをしていくことで、子どもたちに教職員の姿勢が伝わっていきます。その他、子どもたちの関係を把握するために休憩時間に教室に行く、休んでいる子どもへの理解を図る話をする、人の気持ちを考えさせるために「人の気持ち」について語っていく、などが考えられます。

阿部利彦氏は、「先生が、〇〇君の気持ちになって考えてみたらこうだと思ふよ、などの言葉を日常的に使っていけば、同じように言い始める子が出てくるようになりますね」、菅野純氏は「ケンカしたりして興奮しているようなときではなく、普段の安定した精神状態のときに『相手の気持ちは、どうかな』って言われたほうが、ずっと効果的ですよね」と述べています(※1)。

子ども達は、教職員の言葉を聞くとともに、行動をよく見ています。具体的な行動を子ども達に見せていくことが教職員の願いを子どもたちに浸透させていくうえで有効です。

〈島根の教職員の声〉

☆ 荒れのみられる学級で、1学期始業式の次の日から始めたのが「時間を守る」ということだった。「授業時間を守る」というルールのもと、「延長授業は一切しない」と約束し、どんなに授業の展開がよいところでも、授業を終え。すると、子どもたちがだんだん担任を信用するようになってきた。

☆ 教室がいつも乱れていることが気になっていて、終礼後に日直と一緒に教室の掃除と机の整頓をするようにした。しかし、朝礼前にはまた乱れていた。毎日それを繰り返すうちに、朝早くきた生徒たちが掃除や整頓をするようになり、この学級はよく掃除をする学級となった。

◎人とかがわりたいという気持ちを育てる

人とかがわるためには、相当のエネルギーが必要です。でも、現在の学級には、「心のエネルギー」(菅野純氏)と言われるものが不足している子どもたちが多くいるのではないのでしょうか。また、人とのかかわりの中でいい思いをあまり経験したことのない子どもたちもいると思われま。そんな子どもたちには、教職員のさりげない声かけやまなざし、話を丁寧に聴くことを大切にし、「人っていいなあ」「人とかがわりたい」という気持ちそのものを育てたいものです。

教職員のかかわりの力を磨く

学級集団づくりは、教職員の働きかけから始まります。その働きかけの力を意識して磨いていきたいものです。

学年によって子どもたちへの働きかけは変わります。思春期の子どもは「何を言うか」でなく、「誰が言うか」が重要だと言われます。子どもの心に言葉が入る、信頼される「誰」になることが必要です。

また、教職員の言動は、子どもたちの人とかかわる時のモデルともなっています。よいモデルとなりたいものです。

◎子どもたちを育てる思いを

教職員の熱心な思いは子どもたちに伝わります。子ども一人一人を大事に思う気持ちや、「この子がかわいい」という思いがあることが全てのかかわりのスタートであり、子どもたちに届くかかわりが生み出される源になります。

◎基本は「明るい表情（笑顔）」と「明るく穏やかな声」

人が受けとる印象は、耳と目から入る情報に大きな影響を受けると言われています。自分の表情や声が子どもたちにどのように届いているかを、自分で意識しながら子どもたちにかかわっていけるとよいと思います。何気なくしている腕を組むなどの態度も、相手に与える印象を考えてみましょう。

◎まとまった話をする時は、子どもたちの表情を見ながら引きつける工夫を

子どもたちに話す機会の多い私たち教職員ですが、子どもたちの心に届く話ができているでしょうか。時折、自分の話し方をチェックし、よりよいものにしていきましょう。

- ・子どもたちにとって内容が把握できる長さや速さにする
- ・必要な時は視覚も利用する
- ・声に抑揚をつけたり、表情を変えたりする
- ・内容をしぼる

◎「ほめる」「叱る」の工夫と、話を聴いて「これから」を考えさせることを

学級は、同じ学年の子どもたちが集まり、優劣がつきやすい集団です。「できる・できない」ではなく、一人一人の子どもの「成長」や学級の「成長」をほめます。そして、友だちや学級の「成長」を見つけた子どもをほめると、よい循環が生まれます。

叱ることも工夫が必要です。子どもたちの心に入る「叱る言葉」を考えたいものです。

子どもの話を聴き、子どもたち自身に気づかせたり「これから」を考えさせたりしましょう。

◎教職員がよい集団となるように、お互いがよいかかわりを

同僚の教職員の話を聞く姿や、同僚と話し合う姿を子どもたちは鋭く見ています。人とかかわるモデルとなるよう、お互いがよいかかわりをし合い、教職員自身が成長する集団になりたいものです。

アンケートQ-Uを生かす

アンケートQ-Uを学級集団づくりに用いると、以下のようなことが分かります。

- ・不登校になる可能性の高い子どもはいないか
- ・いじめ被害を受けている可能性の高い子どもはいないか
- ・学習や生活で意欲が低下している子どもはいないか
- ・学級崩壊に至る可能性はないか
- ・学級集団の雰囲気はどうか

また、課題への対応だけでなく、成熟した学級集団を積極的に育成する学級経営の工夫のためにもQ-Uが活用できます。下記のことはアンケートQ-Uが示す学級集団づくりの必要条件です。

●学級集団づくりの必要条件

〈ルールの確立〉

家庭で好きなように生活するのと、集団生活を送るのとではわけが違います。教室に集まった子どもたちが共に活動できるようになるためには、共通の行動規範・行動様式を身につけることが必要です。それゆえ、他者とのかかわり方とかかわる際のルール、集団生活を送るためのルール、みんなで活動する際のルール、が学級集団内に共有され定着していることが必要です。それがないと、行動の仕方がわからずにトラブルが続出し、傷つきたくないのに、他者とかかわらなくなってしまう。

〈リレーションの確立〉

リレーションとは、互いに構えのない、ふれあいのある本音の感情交流がある状態です。学級内の対人関係の中にリレーションが育つことで、子ども同士の間仲間意識が生まれ、授業、行事、学級活動などの活動が、協力的に活発になされるようになります。休み時間や給食などの学級生活も楽しいものになっていきます。 (※2)

学級集団をつくっていくときの柱を、アンケートQ-Uは、「ルール」と「リレーション」をつくっていくこととしています。

アンケートQ-Uは児童生徒理解の方法としては、「調査法」（子どもの声を聴く 客観的理解）であり、「観察法」「面接法」と組み合わせて活用していくことが大切です。

◎アンケートQ-Uを活用するために

アンケートQ-Uは学級集団づくりをしていくために、効果的なツールです。島根県内でも多くの学校が実施し、活用しています。その際に気をつけておくことがあります。それは実施する目的を子どもたちにきちんと説明するということです。それは正確なデータを得るためでもありますが、何より誠実に「クラスの一人一人を大事にしたいから、いじめのないクラスを作りたいから、もっと仲のよい学級集団にしたいから」といった教師の願いを説明し、教師の本気さが子どもたちに伝わるのが大切だからです。

そして、結果が返ってきたら、それをもとに必ず面談をしてください。苦しんでいる子どもがいたとすれば、回答を書いたときに「これで何かが変わる」と思っている子どもも必ずいます。

また、結果を校内で見合って研修することも、アンケートQ-Uの活用の際に大切です。

特別活動を生かす

特別活動の目標は、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方（高校：在り方生き方）についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」となっています。

望ましい集団活動を通して進められる活動で、学級集団づくりに深くかわり、ポイントとなる活動であると言えるでしょう。学級集団づくりという視点で、発達段階も踏まえて学年や学校の計画を見直し、教職員の共通理解を図りながら取り組んでいくことが大切です。活動にあたっては、目標や達成方法などを学級全員で話し合っって共通理解して、一人一人が役割をもってその責任を果たしながら自主的に行動し、協力して実践できるようにします。そのためには、互いに認め合い、自由に意見交換ができる雰囲気づくりも心がけます。また、子どもたちが当事者意識をもち、学級（学校）の問題を自分たちが考え解決しようと思えるよう、教師は、一緒に考えたり悩んだり喜んだりしながら支えていきます。

例えば



関係活動 ; 子どもたちが工夫して、組織的、自主的に活動し、よりよい学級生活をつくらうとする活動。「楽しい学級に」「みんなが困らないように」など、具体的にイメージして考える。協力する良さや達成感を。

当番活動 ; 学級のみんなのために誰かがやらなければ困る活動。責任感を育む場

学級会 ; 学級の問題について話し合っって解決する。学級の行事等企画。話し合いの仕方などを学ぶ。

朝の会、帰りの会
教師が願いなどを語ったり、子ども同士かかわったりできるチャンス

児童会・生徒会活動
委員会や児童・生徒会の活動に、学級として協力する。

学校行事 ; 感動と体験を共有。異学年交流で人間関係をつくる力を育てる。

<島根の教職員の声>

- ☆ 小学校1年生の子どもたちが、温かい雰囲気の中で一日を始めることができるよう、朝活動に、かわりをもって楽しめるゲームや話を聞く練習にもなるゲームなど取り入れました。例えば、じゃんけんゲームや指令ゲームなどです。学級活動では、お互いに名前を呼び合っってかわれるゲームも行いました。この活動をきっかけに、友だちができた子どももいます。
- ☆ 縦割り班で校内の掃除をしています。ペア学年（例：1年生と6年生）を組み、同じ場所を同じ道具で掃除しています。高学年にとっては役に立っているという自己有用感を育み、低学年は尊敬の念を抱きます。高学年の子ども同士も共通の課題をもち、話し合うことができます。
- ☆ 中学校の授業を参考に、高校で、グループでの話し合いを取り入れました。自分たちのクラスの良いところや悪いところについては、様々な意見が出ました。それをもとに行事への取り組み方を考え、生徒も満足のいく結果が出せました。

人とかかわる力や集団を育てる学習を実施する

今の子どもたちは、遊びを通して人とかかわる体験や家庭や地域で人とかかわる体験が不足しており、自分や人の気持ちを考えて行動することがうまくできない子どもたちが多くいます。その体験の不足を補い、人とのよいかかわりをつくっていく子どもを育てることが、学校教育を成立させていくためにも必要です。

人が集まる学校という場で、それぞれの学年に応じた、人とかかわる力や集団を育てる学習や活動が提唱されています。特別活動の時間などに意図的計画的に取り入れるとよいと思います。

◎構成的グループエンカウンター（SGE）

教師のリードのもと、安心して安全な場を確保して「エクササイズ」を行い、自己を発見し他者とふれあって、自己を確立していくことを援助します。学級の実態や学年に応じたエクササイズがあり、子どもたちの実態を見ながら実施していくことが大切です。

〈島根の教職員の声〉

中学生にSGE「いいところ四面鏡」を実施しました。子どもたちは、クラスメイトに自分のよいところを見つけてもらって、照れながらも嬉しそうでした。発達の面から、自他を知ることが大切な中学生の時期にぜひ取り入れたい活動です。

◎ソーシャルスキルトレーニング（SST）

人間関係をうまく結ぶための技術を、体験を通して学びます。「してみせて、言って聞かせて、させてみて、ほめてやらねば、人は動かじ」との言葉のように、人づきあいの技を、教職員がモデルとなりながら子どもたちに身につけさせていきます。その際、楽しい雰囲気を大切にします。

○ 人間の気持ちや話し方について学ばせる

高校生に、人間の感情についてロングホームルームで指導している。ふとした瞬間に感じるマイナスの気持ちを、人を傷つけずにどう収めるかということとはとても大事なことだと考えている。高校生とはいえ、自分の気持ちが感じられない幼い生徒もいる。自分の気持ちがわかるようになると行動が変わってくるので、このような指導をしていきたいと考えている。

教師が自分自身を見つめて、「自分にもネガティブな気持ちが出てきたときはこんなふうに収めている。ネガティブな気持ちをよい方向に変えていきたいと思っている」と話し、後ろ向き部分をもちながらも前向きにやっていくことの大切さを伝えている。

また、話し方についてもアサーションの考えを取り入れて指導している。

○ ルールの定着を図る～「上手な聴き方」「上手な話し方」の学習をする

「上手な聴き方」「上手な話し方」の学習をしました。今まで指導していなかったわけではないけれど、学級に共通なものとして子どもたちの心の中に落ちていなかったのかもしれない。学級で一緒に体験して実感することで、子どもたちに共通のルールとして感じられていったと思います。体験を伴った学びを行うと子どもたちの意識はずいぶん違ってきます。

実践事例集第二集「クラスの状態を判断し、子どもたちに考えさせていく」「安心感のある学級づくりを求めて」より

島根県教育センター「学級集団づくり魅力ガイドブック」

人とかかわる力や集団を育てる学習を実施する時の配慮

Ⅱ-4(5)で、SGEやSSTなど、子どもたちの人とかかわる力や集団を育てる学習について紹介しました。しかし、ただ、実施しさえすれば社会性や対人関係能力がすぐに身につくとは限りません。このような学習を実施する上で大切にしたいことがあると言われてしています。

◎教職員が、子どもたちのよいモデルになっているかを確認する

SGEでも、SSTでも、子どもたちが自分の気持ちや行動を見つめたり、人の気持ちや行動を理解しようとしたりすることを進めていきますが、そのためには、そのような取組を進める教職員自身が、子どもたちのお手本になることを意識しておくことが必要です。

阿部利彦氏は、「SSTを行っている先生がまずソーシャルスキルを高める必要があると考えています。やはり、まず先生自身がお手本を示すことが大切ですね。子どもは見て、真似て学びますから。あいさつなどは特にそうですね。(略)モデルとなる先生の行動は子どもの行動に大きな影響を与えます」と述べています(※3)。

◎効果が現れにくい学級や子どもがいることを理解し、働きかけを行う

「望ましい話し方の学習をしたのに、あの子はちっとも変わらない」と感じられることはありませんか。人とかかわることは、エネルギーの要ることです。また、自分の行動を見つめて直していくことも、自分への肯定的な感情がなければできないことと言われてしています。そのような視点で一人一人の子どもを見て、必要と感じたら、エネルギーや自信を与える働きかけを行っていきましょう。

菅野純氏は、「人間に対する基本的な信頼感と元気の素をどのくらい与えられて生きているか、そういうものがある程度揃ってからSSTを行うべきじゃないかというのが私の考えです。学級でもまず、子どもたちの先生に対する信頼感や、みんなと一緒に何かをすることのおもしろさや達成感、努力すれば認められるんだという思いなどを育てた上で、SSTを実施することが大切だと思います」と述べています(※4)。

◎学習のあと、日常に生かすことを視野に入れておく

せっかく学んだことを学級以外の場面で実行してみても快く受け容れてもらえなければ、学習の効果は半減します。学級でこのような学習をしたことを校内の教職員に知ってもらっておくことや、保護者にも知ってもらい、家庭でもその学習が生きるようにしてもらうことが大切です。

また、学習で使った資料を教室に掲示し、その後の生活で意識づけを繰り返すことや、トラブルが起きた時に学習を思い出させて考えさせることで、学習が子どもたちに定着していきます。その際、せっかくの楽しかった学習が子どもたちにとって不快な印象を残すものにならないように、「あの時勉強したでしょ」という指摘に終わらないようにします。そして、よいかかわりができた時にはしっかり認めていくことが大切です。

曾山和彦氏は、『『ありがとう』と、うなずきの多い学級』を例に挙げ、「学級の状態をよくしていけば学力が伸びる」と述べています(講義「子どもの人間関係づくり講座」)。教師も一緒になって、「ありがとう」を言い合うことのよさを実感させ、教室を温かい場所にしていきましょう。

トラブルを成長のチャンスととらえる

学級集団づくりをしていると、「いつも仲がよくてトラブルなど起こらない」学級集団をよしとしてしまうことはないでしょうか。人とかかわりの体験が不足し、自分たちで解決する力が弱くなっている子どもたちですので、一度トラブルが起こると保護者との連携も含めて、それへの対応は教職員にとって大きな時間とエネルギーを使う事態になるのも確かです。

ただ、学級集団づくりが、一人一人の子どもたちを育てるためにあるのであれば、子どもたちに、起きたトラブルに向かい合わせ、それをのりこえていくように働きかけていくことが、まさに学級集団づくりと言えるのだと思います。「人とかかわる力を育て、それでも起きたトラブルには、子どもたちの成長のチャンス」という認識で向かい合いたいものです。

◎トラブルに対する認識を教職員で共有し、保護者にも伝えておく

まず、上記のような認識を教職員みんなで共有することが大切です。それがあれば、担任も安心してトラブルの対応にあたっていけるのではないのでしょうか。そして、そのことを保護者にも年度の初めに伝え、理解を得ておきます。高山恵子氏は、「ソーシャルスキルは授業などで学習してもそれを実際に自然に使えないと意味はありません。日常生活でトラブルが起こった時こそが、最もソーシャルスキルの『学び時・教え時』と言えます」と述べています(※5)。

◎トラブルにかかわった子どもたちの気持ちをしっかり聴いて気持ちを理解し、その上で、望ましい行動を考えさせる

「心理的事実の受容、客観的事実の指導」(嶋崎政男氏)という言葉があります。まず、トラブルにかかわった子どもの気持ちを理解しようとしています。視覚に訴えることが有効な子どもには、図や文に書いてトラブルを整理することも有効です。その上で望ましい行動を考えさせます。

〈島根の教職員の声〉

いろいろなトラブルが毎日起こりますが、そのときに、両者の言い分をしっかりと聞き、じっくり聴くということを4月からずっとやってきました。トラブルを起こした子どもにも思いがいろいろあるので、それも聴いて、何がいけなかったかと考えさせ、どうしたらよいかを自己決定させていきます。聴くと信頼してくれます。人は聴いてもらうと信頼するものです。そうしたら、教師の言うことが入っていき、学級としても成長していきます。

◎学級のなかで、そのトラブルから学んだことを広げていく

人間は、わかってもらうと強くなれる(自分の気持ちをわかってもらうと、自らの非を認める強さが出てくる)ものです。学級の仲間に気持ちを理解してもらい、みんなで考えてもらうことで、変わっていく子どもが出てきます。そして、それは、学級が成長するプロセスでもあります。

〈島根の教職員の声〉

これまでトラブルの当事者同士だけで解決していましたが、学級の子どもたちにトラブルについて投げかけたところ、トラブルを起こしてしまった時のその子どもの気持ちがわかるという子どもたちが現れました。その子どもたちの発言を聞いて、トラブルを起こした子どもは自らの非を認めるようになりました。

ただ、現在、ソーシャルメディアの中で起こっているトラブルは、大人の見えにくいところで広がっています。予防として情報モラル教育を実施したり、トラブルが起きていないか目を配ったりすることが必要です。

支援が必要な子どもたちや 休んでいる子どもたち、その周囲の子どもたちに

学級の中に、特別な支援が必要な子どもたち、不登校や別室登校の状態にある子どもたちもいるかもしれません。そのような子どもたちも学級集団づくりの大切な一員です。

◎特別な支援が必要な子ども、休んでいる子どもに対して

もう言い尽くされてきたことですが、特別な支援が必要な子どもに対して、教職員が、学級集団をつくる上での「困った子ども」という認識をもつと、その認識は、学級の他の子どもたちにも波及してしまうといえます。「困っている子ども」という理解を大切に、困った行動は、その子が出しているSOSと受けとめます。

休んでいる子どもに、「あなたは学級の大切な一員である」ということを伝え続けます。

◎特別な支援が必要な子どもたちの周囲にいる子どもたちに対して

特別な支援が必要な子どもたちへのかかわりが多くなるのは当然のことなのですが、その子どもたちの周囲にいて、授業の準備もきちんとする、授業が中断しても再開をじっと待っているというような子どもたちが、どのような気持ちで学校生活を送っているかを考え、そのような周囲にいる子どもたちへの声かけや承認を忘れないようにします。どの子どもも、自分が認められていると実感することが、子どもたち同士の支え合いの基盤となります。それは、学級集団としての成長につながります。

〈島根の教職員の声〉

2学期後半から、特別な支援が必要な子どもたちの周囲の子どもたちから「先生、遊んで遊んで」という声が出始めました。それまで、私が他の子どもに対応している間、じっと待っていてくれた子どもたちです。私は、「助かる」と思っていました。この子どもたちも「助けて」だったんだと感じました。それからは、「遊んで」と言ってきた子どもたちと1週間に1回ずつは遊ぶようにしたり、意識して声をかけたりするようにしました。

特別な支援が必要な子どもたちには、必ず声をかけますが、その子どもたちの周囲の子どもたちにもどれだけ落とさずに声かけられるかが大切だと思います。

◎学校を休んでいる子どもへの理解や配慮を

学校を休んでいる子どものロッカーなどが何気なく使われていたり、学級の子供から、「授業に出ていないのにこの活動をするのはおかしい」などという声が出たりするようなことはないでしょうか。「今は休んでいるけれど、この学級の大切な一員である」ということを、折に触れて子どもたちに話すことが大切です。それは、学級の誰もがどんな状況になっても大切にされるということを示すことにもなります。

〈島根の教職員の声〉

☆ 長く休んでいる子どもの席は、いつ来ても入りやすいように入り口の近くにしてほしいと子どもたちに頼みました。

☆ 休んでいる子どもに確認してから、折に触れ、その子どもの現在の状況を教室で話しました。

第Ⅲ章

語り合う・向き合う

「学級集団づくりの研修」

校内研修の進め方

教科などの校内研修を実施する機会があっても、学級集団づくりに関する校内研修はあまり行われていないのではないのでしょうか。第Ⅰ章で見てきたように、学級集団は学校の教職員みんなで作っていくものなので、教職員みんなが、共通の認識をもって、どの学級の集団づくりにも参画していく必要があります。

校内研修は、その必要性を認識し、学級集団づくりの意識を共有する絶好の場です。それはまた、お互いが教職員としての力量を高め合う場にもなります。研究主任や生徒指導主任がリーダーとなって、校内で学級集団づくりの研修をしてみませんか。

【題材等一覧】

| 題 材 | ねらい | メンバーの例 | 実施時期の例 |
|-------------------------------|--------------------------------------|---------------|-------------------------------|
| ① 学級集団づくりは 何をめざすのか | 学級集団づくりがめざすものを問い直し、自らの考えを深める | 全校の教職員 | 学年初めの時期 長期休業中など時間に余裕のある時期に |
| ②a ②b 学級のルールについて 考える | 大切にしたいルールは何なのか、どう定着させるかアイデアを出し合う | 学年部 全校の教職員 | 1学期の早い時期に |
| ③ 学級集団づくりの 願いやプランを共有する | 学級担任の願いやプランを知り、共通認識をもって学級集団づくりを行う | 学年部 全校の教職員 | 1学期の早い時期に |
| ④ 一人の“だから”を みんなの“だから”に | 学級集団づくりの「技」や「配慮」を共有し、力量を高める | 全校の教職員 | 長期休業中など時間に余裕のある時期に |
| ⑤ []年 []組の よさや成長を見つける | 学級担任一人では気づけない学級のよさや成長を様々な視点で見つける | 学年部 全校の教職員 | 学期の途中に |
| ⑥ 各学年の子どもたちの 発達の特徴を理解する | 子どもたちの発達の特徴を理解することで、学級集団づくりの具体策につなげる | 学年部 全校の教職員 | 1学期中に |
| ⑦ 教職員みなさんに 感謝していること | 学級集団づくりの基盤となる教職員の協働性・同僚性を高める | 全校の教職員 | 職員会の最後に 長期休業中など時間に余裕のある時期に |
| ⑧ 私はわたし… 語れる「わたし」 披露します | 学級集団づくりの基盤となる教職員の協働性・同僚性を高める | 全校の教職員 | 長期休業中など時間に余裕のある時期に |

※ 2「学級担任のためのワークシート」も、複数の教職員での研修に使えます。

【実施方法】

| 題 材 | 実 施 方 法 例 |
|----------------------------|--|
| ① 学級集団づくりは 何をめざすのか | 1 ワークシート①または付箋に、個人の考えを書きます。 2 グループで考えを出し合い、グルーピングをします。 3 本ガイドブック第Ⅰ章を読みます。 4 もう一度話し合い、最後にワークシートに考えをまとめます。 |
| ② 学級のルールについて 考える | 1 ワークシート②aまたは付箋を使って、個人の考えを書きます。 2 グループで考えを出し合い、優先順位をつけます。 付箋を使った時は、②bのシートを使います。 |
| ③ 学級集団づくりの 願いやプランを共有する | 1 ワークシート③を使ったり、掲示物やパワーポイントを使ったりして、学級担任が自分の学級の集団づくりの願いやプラン、教科担当にお願いしたいこと等を話します。 2 教科担当や関係の教職員は1を聞きます。 3 お互いに質問したり意見を出したりして打ち合わせをします。 |
| ④ 一人の“だから”を みんなの“だから”に | 1 ワークシート④または付箋に、自分の考えを書きます。 2 グループになって1を出し合い、聴き合います。 3 参考になったこと、気づいたことをワークシートに書きます。 |
| ⑤ []年 []組の よさや成長を見つける | 1 ワークシート⑤または付箋に、自分の考えを書きます。 2 グループになって1を出し合います。 3 学級担任が、2を受けてコメントします。 |
| ⑥ 各学年の子どもたちの 発達の特徴を理解する | 1 本ガイドブックのⅡ章「各学年のポイント」の該当学年のページを読みます。 2 それを参考にしながら、学級の子どもの実態と合わせ、ワークシート⑥に学級集団づくりの具体策をまとめます。 |
| ⑦ 教職員のみなさんに 感謝していること | 1 ワークシート⑦を使います。相手の方と自分の名前は書かずに、日頃感謝していることを書いてリーダーに提出します。 2 リーダーは、そのシートをみなさんの前で読み上げます。 |
| ⑧ 私はわたし… 語れる「わたし」披露します | 1 体を動かすウォーミングアップをして雰囲気や和らげます。 2 ワークシート⑧を使います。自分の名前を書いて、リーダーに提出します。 3 リーダーは、そのシートをみなさんの前で読み上げて、誰なのかあててもらいます。そのシートを書いた人に短くコメントしてもらいます。 |

※ それぞれの内容のポイントが書かれた第Ⅱ章を印刷して、手がかりにすることもできます。

| | |
|------------------------|---|
| 学級担任のための ワークシートを使って | 学年部や教科担当、副担任などと一緒に、同じシートを人数分用意してそれぞれが書き込んだ後、話し合います。 |
|------------------------|---|

学級のルール

学年や学校全体で話し合ったことをもとに、自分の学級の実態に合わせて考えてみましょう。

| | 1 | 2 |
|--------------------|--------------------------------------|---|
| 大切にしたいルール | | |
| 子どもたちへの提示の仕方 | *例えば：宣言する、掲示する、 カード形式にする、授業で取り上げる | |
| 指導の継続 と定着を図るために | *他の教職員からも認めてもらう、 ルールの意義を何度も話す | |

どの子どもも、安心して安全に過ごすことのできる学級集団づくりの基盤にあるのが、学級のルールです。でも、学級のルールを守ることにに対して意識の低い子どもたちがいることも事実です。そのような子どもたちにも届くようなルールと、そのルールを定着させていく仕組みをつくっていきましょう。

学級集団づくりの願いやプランを共有する

- 1 一つの学級にかかわる教職員や学年部が集まります。担任が、学級集団づくりの願いや計画を話します。教科担当にお願いしたいことも話します。

担任；願いや計画を記入

学級にかかわる教職員；担任の願いや計画を記入

- 2 質問や意見を交換します。

- 3 学級や学年部ごとに、1～2を繰り返します。

気づいたことをメモ



学級集団づくりは、担任一人だけで行うものではなく、学年部（学年体）や、教科を担当する教員ほか、学校全体で取り組む必要があります。

忙しさの中、担任の願いや計画を教職員で共有することは難しいことですが、そのねうちは大きいものがあります。時間を区切って各学級ごとに時間をとってみませんか。

一人の“だから”をみんなの“だから”に

1 あなたが子どもたちへのかかわりで、「意識的にしていること」「意識的にしないようにしていること」がありますか。言葉やかかわりなど考えてみてください。

例えば…「意識的に使っている言葉」、「使わないようにしている言葉」

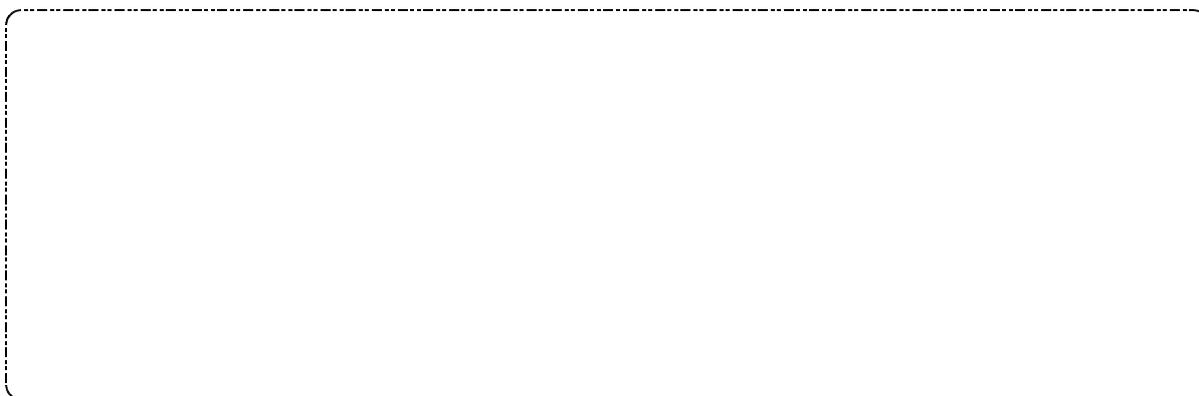
「子どもたちを元気づけるための言葉」、「子どもたち同士をつなげる言葉」

「毎日行っていること」「これだけは続けていること」 など テーマを決めてもOK



2 お互いに出し合ってみましょう。

3 参考になったこと・気づいたこと等をどうぞ。




校内の教職員それぞれに、これまで培ってきた学級集団づくりの「技」や「配慮」があると思います。それを聞いたとしてもすぐに真似できるわけではありませんが、自分の子どもへのかかわりの「引き出し」の中に入れておくことは、教職員としての「幅」を広げることになります。

[] 年 [] 組のよさや成長を見つける

- 1 [] 年 [] 組のよさや成長を教職員で見つけます。学級の子ども個人のことでも、学級全体のことでもかまいません。

Empty dashed box for recording findings.

- 2 お互いに出し合います。担任は最後に話します。

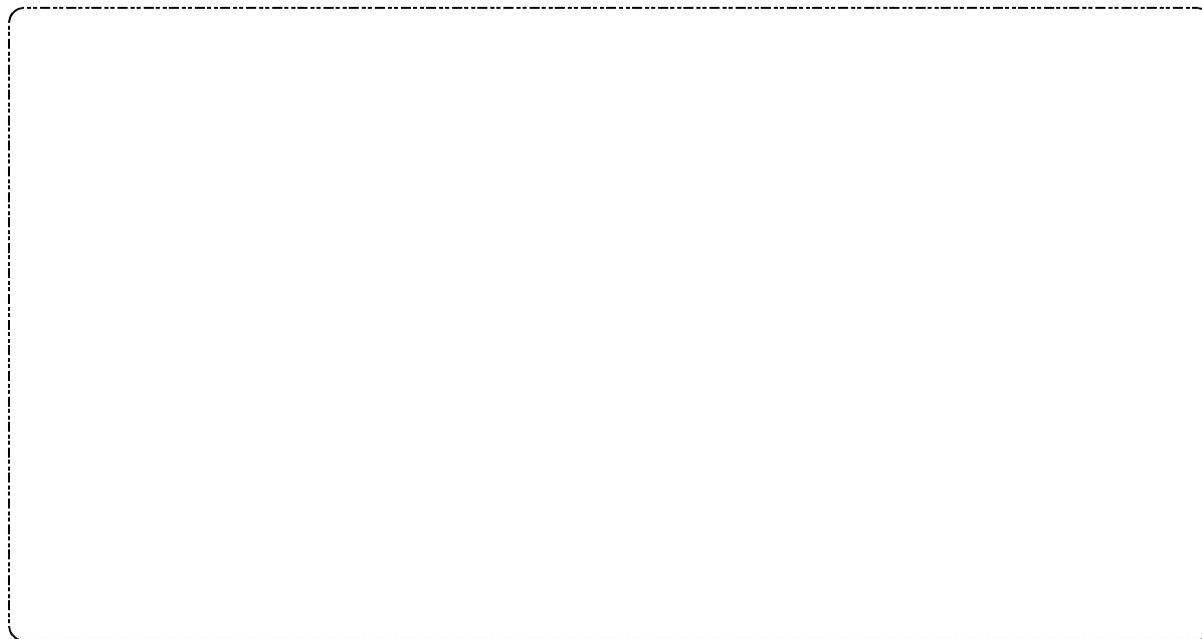
- 3 気づきや感想を書きます。

Empty dashed box for recording reflections.

学年部ごとあるいは全校の教職員で、このシートを学級数用意して実施します。一定期間、各学級のよさや成長を見つける期間を設けてから実施してもよいでしょう。子どもたちを見る目を養う研修にもなると思いますが。

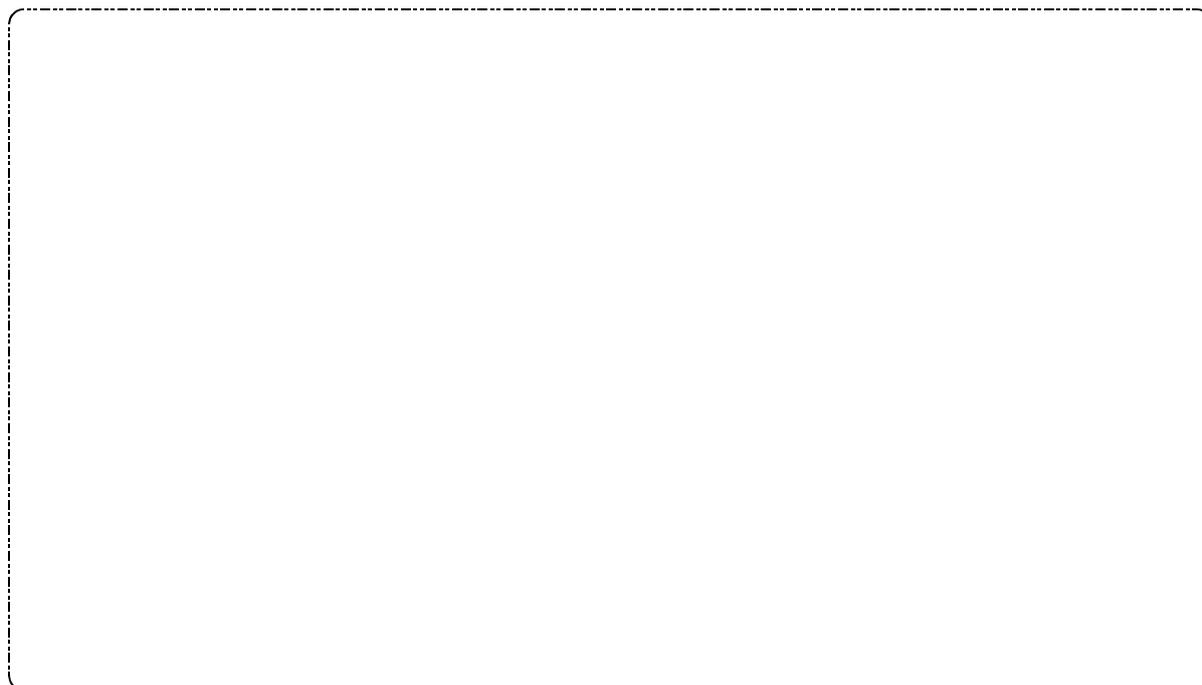
各学年の子どもたちの発達の特徴を理解する

- 1 学年部で、このガイドブックの該当学年のページを読み合い、目の前の子どもたちに照らし合わせてみます。該当すること・異なっていることなどありますか。



- 2 お互いに出し合います。

- 3 発達の特徴をふまえて、取り組みたいことをまとめます。



教職員のみなさんに感謝していること

日頃思っている、なかなか言葉にして伝え合う機会の少ない感謝の気持ちをこの機会に公開してみましょう。(相手の方の名前と自分の名前は書かずに)

| | | |
|--|--|--|
| | | |
|--|--|--|

----- 切り取り -----

私はわたし…語れる「わたし」披露します

教職員で行う構成的なグループエンカウンターの一つです。「ひそかに自慢できること」「若い頃の思い出」「これからの夢」など、人に語れる内容で「わたし」を披露しましょう。

| | |
|--|--|
| | |
|--|--|

<氏名

>

学級集団づくりのプランをたてる

学校経営目標・学年経営目標 等

現在の姿〈良い点・課題となる点〉

担任の願い

子どもの願い

学級の願い・目標

取り組みたいこと～どのような姿が現れることをよしとするか

学級集団の状況を把握する

第Ⅱ章1（2）を手がかりにしながら、現在の学級の状況を把握してみましょう。

- 1 学級集団の状況を見る視点を定める * 授業態度 朝終礼の態度 教室の整頓状況 など

- 2 その視点から現在の学級の状況を見て、要因を考える

- 3 次の一手を考える

つきたい力を考える

第Ⅱ章1（4）を手がかりにしながら、学級としてつきたい力や、一人一人の子どもたちにつきたい力を考えてみましょう。

1 学級としてどんな力をつきたいですか～みんなができるようになるといいこと～ 例えは3つ！

2 あの子ども、この子どもにどんな力をつきたいですか。それは、なぜですか。

気にかかっていることを整理する

1 学級について、今、気にかかっていることを書き出してみましょう。

| | |
|---|---|
| 1 | 2 |
| 3 | 4 |
| 5 | 6 |

書いているうちに、よくなっていること・成長していることが見えてきたら、ここに！

| | |
|--|--|
| | |
|--|--|

2 上記1の理由や原因となっていること・背景となっていることを考えてみましょう。

| | |
|---|---|
| 1 | 2 |
| 3 | 4 |
| 5 | 6 |

3 これから取り組むとしたらどのことからやりますか。優先順位をつけて取組を考えてみましょう。

| |
|-----|
| 第1位 |
| 第2位 |
| 第3位 |

子どもたちに語る自分のこと

◇ 私の好きなこと・私の宝物

◇ 私の失敗・私の苦手

◇ 人とかかわる時に大切にしていること

◇ ちょっとうれしかったこと・許せないこと

◇ 私の []

・愛読書 ・好きな言葉 ・ニュースを見て思ったこと ・学校時代の自分 など

学級をつくる時、担任と子どもが互いに理解し合うことは大切。また、子どもにとって教職員は身近なモデルです。様々な折に、自分を語ってみましょう。ただし、子どもの様子を見ながら。長くなりすぎたり、“先生の自慢話”とだけとられたりしてはせっかくの時間がマイナスになります。家族の話も、学級の子どもの実態をふまえたうえで。

教室環境をチェックしよう！

◇ 黒板（粉受け、黒板消し）



きれいですか・・・・・・・・・・・・・・（ ）

落書きはありませんか・・・・・・・・・・・・・・（ ）

memo



◇ 机

整頓されていますか・・・・・・・・・・・・・・（ ）

落書きはありませんか・・・・・・・・・・・・・・（ ）

◇ ロッカー

整頓されていますか・・・・・・・・・・・・・・（ ）

落書きはありませんか・・・・・・・・・・・・・・（ ）

◇ 掲示物

外れそうになっていませんか・・・・・・・・・・・・・・（ ）

落書きはありませんか・・・・・・・・・・・・・・（ ）

傷ついていませんか・・・・・・・・・・・・・・（ ）

◇ 植物や生き物

世話がされていますか・・・・・・・・・・・・・・（ ）

周りが散らかっていませんか・・・・・・・・・・・・・・（ ）

◇ 学級文庫の本

整頓されていますか・・・・・・・・・・・・・・（ ）

汚れや破損はありませんか・・・・・・・・・・・・・・（ ）

◇ ごみ箱

気になるものは入っていませんか・・・・・・・・・・・・・・（ ）

◇ そうじ道具

整頓されていますか・・・・・・・・・・・・・・（ ）

壊れているものはありますか・・・・・・・・・・・・・・（ ）

子どもたちは、いろいろなところにサインを出しています。朝や放課後など、普段から教室の環境に気を配り、おかしいなと感じたら、個や集団の様子を見つめ直してみましよう。

【引用文献】

- 『育てるカウンセリング実践シリーズ2小学校編 グループ体験による（タイプ別）学級育成プログラム』
河村茂雄編著（2005 図書文化）
- 『生徒指導・学級経営上の課題への取組～県内の公立小・中学校の実践に学ぶ』
島根県教育センター（平成22年3月）
- 『生徒指導・学級経営上の課題への取組～県内の公立小・中・高等学校の実践に学ぶ・事例集第二集』
島根県教育センター（平成24年3月）
- 「ようこそ“アベかん”の教育相談・特別支援教育セミナーへ」 <※1, 3, 4>
菅野純・阿部俊彦（2013・12月号 2014・1月号 ほんの森出版『月刊教育相談』）
- 『発達障害の子どもとあったかクラスづくりー通常の学級で無理なくできるユニバーサルデザイン』 <※5>
高山恵子編 松久真実・米田和子著（2011 明治図書）

【参考文献】

- 『生徒指導提要』文部科学省（平成25年3月）
- 『小学校学習指導要領解説 特別活動編』文部科学省（平成20年8月）
- 『中学校学習指導要領解説 特別活動編』文部科学省（平成20年9月）
- 『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』文部科学省（平成21年12月）
- 『「集団づくり」論の推移 一人権の視点からの再考ー』
松下一世著（2012 佐賀大学文化教育学部 教育学・教育心理学講座）
- 『学級集団づくりのゼロ段階』河村茂雄（2010 図書文化）
- 『日本の学級集団と学級経営ー集団の教育力を生かす学校システムの原理と展望ー』
河村茂雄著（2009 図書文化）
- 『シリーズ事例に学ぶQ-U式学級集団づくりのエッセンス 集団の発達を促す学級経営 小学校低学年』
河村茂雄監（2013 図書文化）
- 『シリーズ事例に学ぶQ-U式学級集団づくりのエッセンス 集団の発達を促す学級経営 小学校中学年』
河村茂雄監（2012 図書文化）
- 『シリーズ事例に学ぶQ-U式学級集団づくりのエッセンス 集団の発達を促す学級経営 小学校高学年』
河村茂雄監（2012 図書文化）
- 『シリーズ事例に学ぶQ-U式学級集団づくりのエッセンス 集団の発達を促す学級経営 中学校』
河村茂雄監（2012 図書文化）
- 『シリーズ事例に学ぶQ-U式学級集団づくりのエッセンス 集団の発達を促す学級経営 小学校高等学校』
河村茂雄監（2013 図書文化）
- 『いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル 小学校低学年』
河村茂雄・品田笑子・藤村一夫編著（2008 図書文化）
- 『いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル 小学校中学年』
河村茂雄・品田笑子・藤村一夫編著（2007 図書文化）
- 『いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル 小学校高学年』
河村茂雄・品田笑子・藤村一夫編著（2012 図書文化）
- 『Q-U式学級づくり 小学校低学年ー脱・小1プロブレム「満足型学級」育成の12か月ー』 <※2>
河村茂雄・藤村一夫・浅川早苗編著（2008 図書文化）

- 『Q-U式学級づくり 小学校中学年 ーギャングエイジ再生「満足型学級」育成の12か月ー』
河村茂雄・藤村一夫・浅川早苗編著（2009 図書文化）
- 『Q-U式学級づくり 小学校高学年 ーブレ思春期対策「満足型学級」育成の12か月ー』
河村茂雄・藤村一夫・浅川早苗編著（2009 図書文化）
- 『Q-U式学級づくり 中学校 ー脱・中1 ギャップ「満足型学級」育成の12か月ー』
河村茂雄・粕谷貴志・鹿島真弓・小野寺正己編著（2008 図書文化）
- 『Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド ー中学校編ー』河村茂雄
河村茂雄・小野寺正己・粕谷貴志・武蔵由佳編（2007 図書文化）
- 『学級経営に生かすカウンセリングワークブック』河村茂雄著（2006 金子書房）
- 『小学一年生の心理 幼児から児童へ』高木和子編（2000 大日本図書）
- 『小学二年生の心理 なじんだランドセル』高木和子編（2000 大日本図書）
- 『小学三年生の心理 次のステップアップ』落合幸子編（2000 大日本図書）
- 『小学四年生の心理 十歳一二分の成人式』落合幸子（2000 大日本図書）
- 『小学五年生の心理 自由なナンバー2』落合良行（2000 大日本図書）
- 『小学六年生の心理 子ども期からの旅立ち』落合良行（2000 大日本図書）
- 『中学一年生の心理 心とからだのめざめ』落合良行（1998 大日本図書）
- 『中学二年生の心理 自分との出会い』落合良行（1998 大日本図書）
- 『中学三年生の心理 自分の人生のはじまり』落合良行（1998 大日本図書）
- 『<学級>の歴史学 自明視された空間を疑う』柳治男著（2005 講談社選書メチエ）
- 「一人ひとりを生かす集団づくり学級づくりの実践」真仁田昭・深谷和子・有村久春・沢崎達夫編
（2007 『児童心理2007年4月号臨時増刊No. 858』金子書房）
- 『児童心理 11月号』深谷和子編（2012 金子書房）
- 『児童心理 5月号』深谷和子編（2013 金子書房）
- 「小学一年生・二年生のころと世界」
深谷和子編（2012 『児童心理2012年4月号臨時増刊No.948』金子書房）
- 「小学三年生・四年生のころと世界」
深谷和子編（2012 『児童心理2012年8月号臨時増刊No.954』金子書房）
- 「小学五年生・六年生のころと世界」
深谷和子編（2012 『児童心理2012年6月号臨時増刊No.951』金子書房）
- 『指導と評価 2013年5月号～2014年3月号』辰野千壽編（2013・2014 図書文化）
- 『初等教育資料 9月号』文部科学省（平成24年）
- 『OSAKA人権教育ABC Part 2ー集団づくり「基礎編」ー』（2008 大阪府教育センター）
- 『達人が伝授！すぐに役立つ学級経営のコツ（1年次）』（平成25年2月 香川県教育センター）
- 『通常学級の授業ユニバーサルデザイン』
日本特別支援教育研究連盟編 佐藤慎二、漆沢恭子責任編集（2010 日本文化科学社）
- 『学級経営の実践ガイド基礎から活用へ』佐藤慎二、太田俊己編（2010 明治図書）
- 「元氣と勇気の学び場めぐり 学んでつながる先生たち」
赤坂真二著（2013 ほんの森出版『月刊教育相談』2月号）
- 『荒れには必ずルールがあるー間違った生徒指導が荒れる学校をつくるー』
吉田順著（2013 学事出版株式会社）
島根県教育センター「学級集団づくり魅力ガイドブック」

- 『子どもの力は学び合ってこそ育つー金森学級38年の教え』金森俊朗（2008 角川書店）
- 『時々、“オニの心”が出る子どもにアプローチ 学校がするソーシャルスキルトレーニング』
曾山和彦著（2011 明治図書）
- 『時々、“オニの心”が出る子どもにアプローチ2 気になる子に伝わる言葉の“番付表”』
曾山和彦著（2013 明治図書）
- 『子どもの「10歳の壁」とは何か？ 乗り越えるための発達心理学』渡辺弥生著（2013 光文社）
- 『よりよい人間関係を築く 特別活動』杉田洋著（2010 図書文化）
- 『カウンセリングで学級経営12か月』中野目直明・有村久春編著（2003 東洋館）
- 『思春期の子どもの心をつかむ生徒指導 10の心得&場面別対応ガイド50』
垣内秀明著（2013 明治図書）
- 『対話でつむぐ 愛と勇気の生徒指導 ホンネでぶつかり合うクラスづくりのすすめ』
堀川真理著（2013 明治図書）